



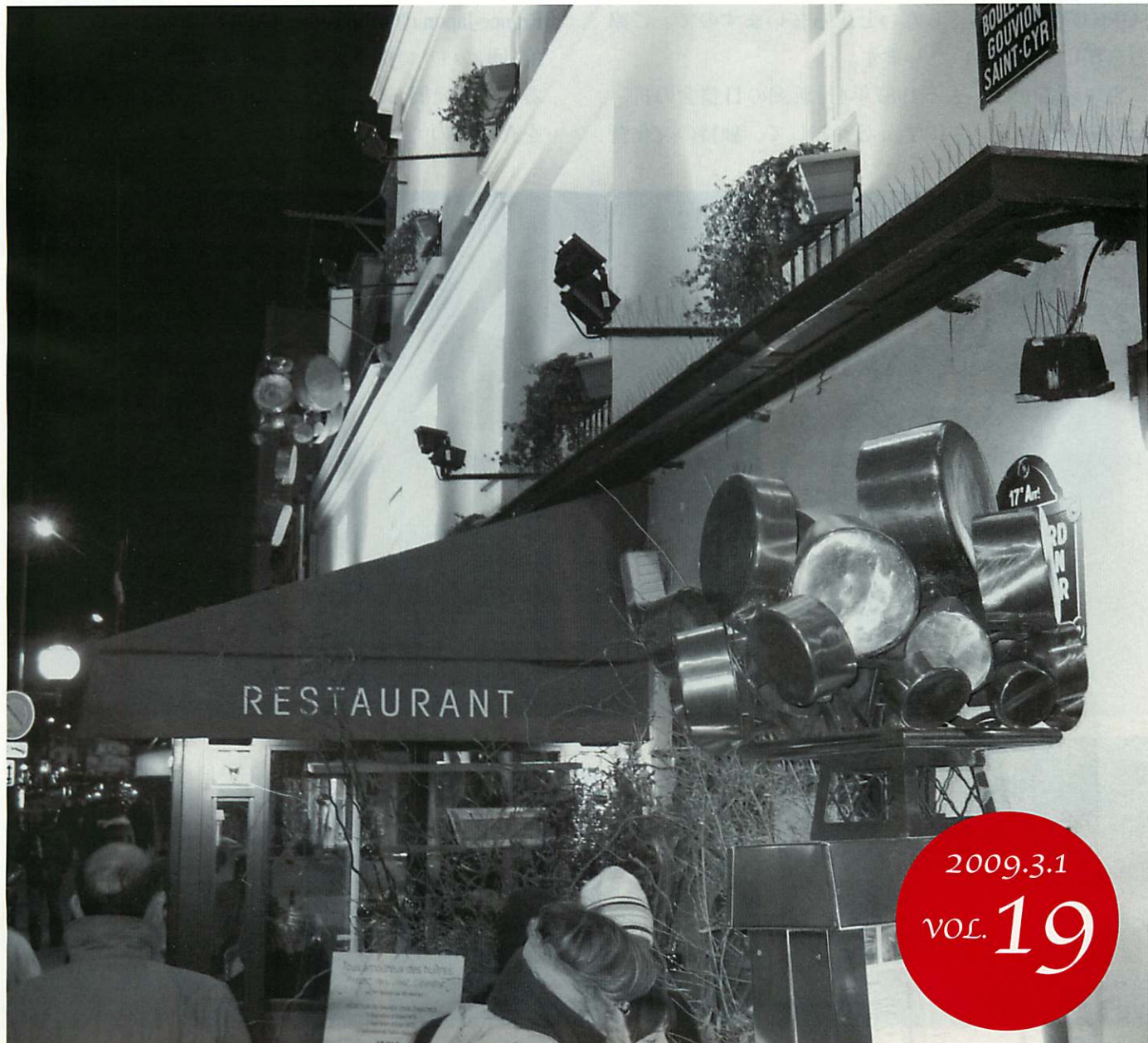
INFOS

日仏整形外科学会広報誌

アンフォ

- | | | |
|---|--|---|
| ■名譽会長.....七川 敬次
Président d'honneur — K. SHITIKAWA | ■会長.....小林 晶
Président — A. KOBAYASHI | ■副会長.....瀬本 喜啓
Vice-Président — Y. SEMOTO |
| ■書記長.....大橋 弘嗣
Secrétaire général — H. OHASHI | ■書記・会計.....弓削 至
Secrétaire et Tréscrier — I. YUGE | 青木 清 藤原 憲太
K. AOKI K. FUJIWARA |
| ■幹事.....坂巻 豊教
Membre exécutif — T. SAKAMAKI | 金子 和夫 安永 裕司
K. KANEKO Y. YASUNAGA | ■名譽会員.....小野村 敏信
Membre d'honneur — T. ONOMURA |

- 事務局：〒 530-0012 大阪市北区芝田 2 - 10 - 39 大阪府済生会中津病院内（係：大橋弘嗣）
Tel. (06) 6372-0333 Fax. (06) 6372-0339
- Bureau : Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku, Osaka 530-0012 JAPON
- 発行所：〒 530-0012 大阪市北区芝田 2 - 10 - 39 大阪府済生会中津病院（編集者：大橋弘嗣）
Tel. (06) 6372-0333 Fax. (06) 6372-0339
- Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku, Osaka 530-0012 JAPON (Éditeur : H. OHASHI)
- ホームページアドレス：http://www.sofjo.gr.jp



2009.3.1
VOL. 19

三代目会長就任のご挨拶

去る2008年9月27日の第13回日仏整形外科学会（SOFJO）学術集会の総会で、会長に任命された小林です。甚だ光栄なことですが、その責任の重さを痛感しております。初代の七川徹次先生、二代目の小野村敏信先生が、それぞれ立派な業績を遺されて今日のSOFJOの基礎を創られ、且つその後の繁栄を見ると、この浅学菲才の身がその継承に耐ええるのかどうか、一層引き締まる思いがしております。皆さんとともに、SOFJOの発展に尽くしたいと思っておりますので、ご協力を宜しくお願いいたします。

思い起こせば、去る1987年4月新潟の日整会の折、七川先生とフランスに学んだ者として、独特の文化背

景を持つこの国との友好、および学術交流を計画をしたのが、SOFJOの嚆矢でした。すぐ東京の菅野卓郎先生にも加わっていただき、同年の11月神戸で故広畑和志先生（当時神戸大学教授）を第1回の学術集会会長として開催されました。

次いでフランス側とも連絡の上、お互いの国で交互に学術集会を開催すること、若い整形外科医の交換留学生制度の制定などを決め、これはAssociation France-Japon d'Orthopédie (AFJO) と命名されました。第1回はパリで開催され、来年の沖縄で第10回を迎えるまでに発展しています。この間、全てのエネルギーをAFJOのため捧げられた、リヨンの故Charles



小林 晶

PICAULT先生（2004年逝去）のご尽力を忘れることはできません。

これまでの多数の交換留学生もお互いの国の整形外科の実情を知り、ほとんどの人達が満足して帰国されているのも喜ばしい限りです。フランス側も第13回SOFJOで講演したWicart教授のように、かつて留学生として来日された人が栄達されていることは、われわれ受け入れた側の栄誉でもあります。

これらの歴史的背景を考えると、われわれに課せられた使命は甚だ大きいといわざるをえません。

私は先ず二つの提案を行いたいと思います。

第一はSOFJOを是非日本整形外科学会に認知してもらうことです。日整会誌の会告欄に国際学会関係の会告として、日米、日英、日米加、日韓、日中関係の学会報道がなされていることを、ご存知の方も多いと思います。世界の趨勢がアングロサクソン系やアジアの隣国との連携を緊密にさせているのは理解できますが、われわれの歴史的背景と熱意は、これらの諸国との関係と同等であっても劣ること全くありません。フランス側は既にSociété Française de Chirurgie Orthopédique et Traumatologique (SOFJOT, フランス整形災害外科学会)が認知し、後援しています。AFJOの開催予告もかならず掲載されていますし、会報のbulletinにも丁寧な会告と、さらに交換留学生応募要項まで掲載されています。

日整会との関係を持つ意義は、会員への伝達、国際的發展、他学会との連携などのために、会の存在が認知されることと運営が円滑にゆくことが期待されます。

第二に会の運営に必要な資金の問題です。学術総会はこのこれまでの会長、執行部の努力で実施されてきましたが、交換留学生制度の維持、会報「INFOS」の発行、大きくなってきた事務局経費などを考えるとき、このままの状態では早晚行き詰まりが危惧される現状です。

会費は今年度から値上げをさせていただきましたが、これとてもやっと「INFOS」の発行が可能になる程度

です。会費を会員一同遅滞無く納入していただくのは、最小限われわれの義務ですが、いかにして浄財を集めるかの方策を真剣に考えてゆかねばなりません。執行部として知恵を絞りながら、考えてゆきたいと考えていますが、会員皆さんのご協力が欠かせませんので、提案があればどしどしお寄せいただきたいと念願する次第です。

最後に会員の皆さんに個人的にお願いしたいことがあります。それは日仏と銘打つからには、少なくとも多少のフランス語を身につけておく努力と度量を、持っていたきたいことです。先日のSOFJOでフランス人のコメントがない場合は、日本人同士が日本語で質疑をする姿は、フランス人に失礼ですし、通訳がついて全部通訳で済ますのも複雑なことだし、うっかりすると仏の存在が忘却されていると感じました。もちろん、討論をフランス語で、とまでは無理としても、ブロークンでも英語でもやりとりをする親切が欲しいと思います。それが招待フランス人に対するもてなしの一つでしょう。フランスに行って、多少のフランス語を話すことの快感と交流の深さを、実感する人々は多いはずですが、みすみす機会を失うのは痛恨のきわみだと私個人は考えています。

「ふらんすへいきたしと思えども、ふらんすはあまりに遠し・・・」という朔太郎の感慨は、あれから一世紀経つ今はもう通用しません。それだけに我々はさらに、整形外科学のみならず、文化的にもあらゆる機会を利用して、交流を深めてゆくことを念願しております。Vivent la SOFJO et l'AFJO!

SOFJO会長交代のご挨拶

2008年9月に金子和夫教授の主催で行われた第13回日仏整形外科学会の総会におきまして、この学会SOFJOの会長を私から小林晶先生に引き継ぐことのご承認をいただきました。振り返ってみますと2003年に七川歓次先生からショートレリーフのつもりでお受けしたのですが、はからずも5年間ということになり、日仏合同会議AFJOではGrenoble (P.Merloz会長)、京都(瀬本喜啓会長)、Nice (J.Caton 会長)、国内学会SOFJOは神戸(私が会長)、京都(久保俊之会長)、東京(金子和夫会長)に関わってまいりました。この期間を大過なく過ごすことができましたのは、ひとえに会員ならびにご関係の皆様からいただきましたご支援ご協力の賜物であると、心から御礼申し上げる次第です。

われわれの学会は発足依頼すでに20年余りを経過しています。日仏整形外科医の医学的、文化的交流を通じて、両国の友好を深めるということが当初に掲げられた目標でしたが、定期的な学術集会に加えて青年医師の交換研修制度が発足し、それが既に20年近く現在まで続けられていること、また両国の共同研究が行われて有意義な結果が得られたことなどは、わが国整形外科の国際交流の歴史の中では特筆すべきものであると言えます。このように実績を積んでいくことができたのは、日本にとってフランス、フランスにとって日本がそれぞれ惹かれるところの多いお国柄であるということはあるとしても、発足以来イニシャチヴをとってこられた両国の先生方、日本では七川歓次、



小野村 敏信

菅野卓郎、小林晶諸先生のご努力、そして会員の諸先生方のご協力によるものであります。

現在わが国で医療を取巻く情勢が容易ならざる事態となったことを受けて、整形外科そのものも厳しい環境におかれつつあります。フランスの整形外科も似たような状態にあると聞きます。そこにさらに百年に一度といわれる世界規模の経済不況が加わってきました。SOFJOは会員数も決して多いということではありません。医学、医療に対する社会の支援が次第に得がなくなっているという状況の中であって、この限られた数の会員によって会の活動を維持してゆくことは決して容易ではないでしょう。幸いなことに新しく会長に就任された小林晶先生フランス、日本双方の医学事情に精通され、的確な判断

と情熱をお持ちであり、この会をより充実させる方向にご指導いただける最適任の方であると思います。しかし会の発展のためには会員のご理解がどうしても欠かせぬものであり、皆様方とくに若い先生方のより積極的なご協力を私からもお願いする次第です。

今、会長職を退いてなんとなく肩の荷が下りてホッとした気分となり、これまで日仏両国の会員ならびに関係の方々と一緒に過ごしてきたことを、あれこれ思い出しております。本当にいろいろと有難うございました。これからはいづれか気楽な立場で、少しでもこの会のお役に立つことができたらと思っています。さしあたっては、目の前に迫った5月の沖縄での第10回AFJO合同会議を皆様と一緒に盛り上げましょう。



第13回 日仏整形外科学会を開催して

国際的、学際的、総合的な展開を期して

第13回の本学会は、2008年9月27日(土) 都市センターホテル(東京都千代田区平河町)にて、順天堂大学医学部附属静岡病院整形外科教授・金子和夫会長(写真1)のもと開催されました。



●写真1 金子和夫大会長による開会挨拶

台風シーズンで天気も心配されましたが、幸い天候にも恵まれ、フランスからの参加6名をはじめ、各地から140余名の参加者がありました。今回は特にテーマはありませんでしたが、フランスよりお招きした先生方による招待講演、フランスへ留学された先生方による交換研修帰朝報告がメインとなりました。また、一般演題では、フレンチテクニックおよび外傷を中心とした股関節と、腫瘍のセッションに、フランスから招待した演者の先生にコメンテーターとして参加していただくという試みがあり、盛況におこなわれました。

予想以上の演題が集まりプログラムもかなりタイトなものになりました(P7,8)。

【招待講演】 招待した3名の先生それぞれ2演題ずつの講演が行われました。

- Fracture of the proximal femur: True cervical fracture.
- Fracture of the trochanteric region-evolution in treatment over the last twenty years in France.

Gilbert Taglang (University Hospital of Strasbourg, Strasbourg,) (写真2)

- History of pediatric orthopedics in France.
- Concept of calcaneo pedal block in foot disorders. Philippe Wicart (Saint-Vincentde Paul Hospital, Paris) (写真3)
- Cell therapy for hip osteonecrosis: percutaneous autologous bone marrow grafting.
- Autologous bone marrow transplantation for non-unions and delayed-unions.

Philippe Hernigou (Henri Mondor Hospital, Creteil) (写真4)



●写真2 熱弁をふるうTaglang先生



●写真3 順天堂浦安病院教授一青勝雄線より記念品を授与されるWicart先生

順天堂大学医学部附属静岡病院整形外科 金子和夫
第13回日仏整形外科学会会長



●写真4 コメンテーターとして発現中のHernigou先生

【交換研修帰朝報告】2006年から2008年の間にフランスで研修された7名の先生による講演が行われました。研修先はパリを始めとし、リヨン、メス、グルノーブル、ニース、アヌシーなど多方面にわたっており、各地方での研修のみならず食・住などについても報告があり、和やかな雰囲気のもと行われました（写真5）。

【一般演題】今回は42題に上る一般演題の発表がありました。フレンチテクニックを中心とした股関節のセッションではPhilippe Hernigou先生が、外傷の股関節セッションではGilbert Taglang先生、また腫瘍・基礎のセッションではPhilippe Wicart先生がコメンテーターとして参加し、活発な質疑応答が行われました。なかでも肺動脈血

栓塞栓の予防としての抗凝固療法では日仏の違いが浮き彫りにされ、人工股関節においては30日間投与がフランスでは原則とPhilippe Hernigou先生から指摘されました。

次回、第14回日仏整形外科学会は、安永裕司先生（広島大学）のもと、2010年に開催される予定です。また第10回日仏整形合同会議は2009年5月28日（木）から30日（土）まで沖縄県宜野湾市・沖縄コンベンションセンターにおいて大橋弘嗣議長のもと開催されますので多くの先生方のご参加が期待されます。

末筆ながら、当学会開催中何かと行き届かぬ点がございましたことにお詫びするとともに、運営にご協力・ご尽力いただきました、順天堂大学整形外科学教室および順天堂静岡病院整形外科医局員の方々に感謝いたします（写真6）。さらに、ご高配頂きました各位に誌面をお借りして御礼申し上げます。



●写真5 交換研修帰朝報告



●写真6 招待講演者および学会スタッフ

第13回 SOFJO

第13回 SOFJOプログラム

■ 日程表

	第一会場 (コスモス)	第二会場 (コスモス)
9:00		
9:30	開会 9:30 会長挨拶 金子和夫	
9:35-10:40	一般演題1 上肢・手 I 座長 佐々木伸 戸部正博	9:35-10:20 一般演題4 膝 座長 丸山裕一郎
10:00		
10:30		10:20-11:20 一般演題5 脊椎 座長 弓削 至
10:45-11:50	一般演題2 股関節 I フレンチテクニックほか 座長 田中千晶 柁原俊久 P. Hernigou (コメンテーター)	
11:00		11:20-12:10 一般演題6 腫瘍・基礎 座長 小山内俊久 大林 治 P. Wicart (コメンテーター)
11:30		
12:00		
12:10-13:10	特別講演1 S-1 G. Taglang 座長 宮岡英世 最上敦彦	
12:30		13:10-13:30 総会
13:00		
13:30		
13:40-14:25	一般演題3 股関節II・外傷 座長 大橋弘嗣 上島圭一郎 G. Taglang (コメンテーター)	13:40-14:35 一般演題7 上肢・手 II 座長 富田善雅 岩瀬嘉志
14:00		
14:30		
14:40-15:40	特別講演2 S-2 P. Wicart 座長 一青勝雄 瀬本喜啓	
15:00		
15:30		
15:40-16:40	特別講演3 S-3 P. Hernigou 座長 久保俊一 野沢雅彦	
16:00		
16:30		
17:00	16:50-18:20 帰朝報告 パネルディスカッション 座長 金子和夫 小林 晶	
17:30		
18:00		
18:30	閉会 会長挨拶 金子和夫	18:30-20:00 日仏整形外科交流会
19:00		
19:30		

Programme du Sejour

	Salle 1 (COSMOS)	Salle 2 (COSMOS)
9 : 00		
9 : 30	9:30 Discours d'ouverture K. Kaneko	
10 : 00	9:35-10:40 Communications Particulières 1 Poignet / Main Modérateurs S. Sasaki (Tokyo) M. Tobe (Tokyo)	9:35-10:20 Communications Particulières 4 Genou Modérateurs Y. Maruyama (Tokyo)
10 : 30		10:20-11:20 Communications Particulières 5 Rachis Modérateurs I. Yugué (Fukuoka)
11 : 00	10:45-11:50 Communications Particulières 2 Hanche Modérateurs C. Tanaka (Kyoto) T. Kajiwara (Kanagawa) P. Hernigou	11:20-12:10 Communications Particulières 6 Tumeurs / Recherche Modérateurs T. Osanai (Yamagata), O. Ohbayashi (Shizuoka) P. Wicart
12 : 00		
12 : 30	12:10-13:10 Conférence 1 G. Taglang (Strasbourg) Modérateurs H. Miyaoka (Tokyo) A. Mogami (Shizuoka)	
13 : 00		13:10-13:30 Assemblée Générale Ordinaire de la S.O.F.J.O.
13 : 30		
14 : 00	13:40-14:25 Communications Particulières 3 Traumatologie Modérateurs H. Ohashi (Osaka), K. Ueshima (Kyoto), G. Taglang	13:40-14:35 Communications Particulières 7 Membre Supérieur Modérateurs Y. Tomita (Tokyo) Y. Iwase (Tokyo)
14 : 30		
15 : 00	14:40-15:40 Conférence 2 P. Wicart Modérateurs K. Shitoto (Chiba) Y. Semoto (Osaka)	
15 : 30		
16 : 00	15:40-16:40 Conférence 3 P. Hernigou Modérateurs S. Kubo (Kyoto) M. Nozawa (Tokyo)	
16 : 30		
17 : 00	16:50-18:20 Symposium Rapports de Stage en France Modérateurs K. Kaneko (Shizuoka) A. Kobayashi (Hakata)	
17 : 30		
18 : 00		
18 : 30	Clôture K. Kaneko	18:30-20:00 Soirée du Congrès
19 : 00		
19 : 30		

平成16年度日仏交換研修プログラムに参加して

広島大学大学院整形外科

久留隆史先生

私は平成16年4月から6月までの3ヶ月間にわたり、日仏交換研修プログラムの援助を受けてフランスに留学させていただきました。3月31日に家族を日本に残して、単身で胸一杯に不安を抱えながら、広島駅から新幹線に乗り込みました。一応せめて挨拶ぐらひはフランス語で行いたいと思い、約3ヶ月間フランス語の学校に通いせつせと単語を覚えたのですが、所詮幼稚園レベルのボキャブラリーにとどまり大変心細く思いながら日本を出発した次第です。

関西国際空港を出国してパリ経由リヨン空港に降り立った時に、まずはじめに驚いたのがフランスのこの季節の日照時間の長さでした。リヨ市内へのシャトルバスに乗って予約していたホテルに着いたのは既に夜10時を回っていたのですが、日本で言えば夕方日没前の薄暗さ程度でまだ春休み中なのか小学生ぐらひの子供たちは外でサッカーボールを蹴って遊んでいま

た。これは後で聞いた話なのですが、子供たちも夜なかなか日が暮れないのでいつまでも寢床に入らず遊んでいるため、この時期の学校での居眠りが大変多いのだとの事です。

さて一晩ホテルに泊まった翌朝、朝6時に起床して最初の訪問先であるClinique Emilie de Vialarに到着し秘書に面会し暫く待っていますと、身体はあまり大きくないのですが独特の風貌と朗らかさを兼ね備えたDr Jacques Catonがにこやかに迎えてくれました。当日は確かTHA4症例、TKA1症例の手術予定であったと記憶していますが、いきなり手洗いし第2手術助手（通常2~3人で手術は行われている）として脚持ちを命じられ、あれよあれよという間に気がつけば夜の7時を回っておりまして。その後、外人の重い足を持ち続けた腕に軽い筋肉痛を覚えながら、「やっと終わった、さあ帰ろう」と思っていると今度はなんと外来診察が始まっ



●Lyonの町並み



●Dr Catonと私

てしまい、一体何時まで働くのだろうかと思っていると終わったのは既に10時を回っておりました。慣れない土地で心底へとへとになって、昼に案内されていたレジデント用の宿舎にたどり着いた時はこの先毎日このような生活が続くのだろうかと考え、かなりブルーな気持ちになったものでした。

しかしながらこの病院での手術は週2回で、またフランスは結構祝日が多く、やれ復活祭だなんだで休みがちであり、しかもDr Catonは精力的に学会参加や出張など公務に追われ休むことが多いため、実際あとから振り返ってみますとそれほど過酷ではなく少し気が張りすぎていたようでした。基本的には週休2日（土曜日と日曜日は休日）で残り3日はまた別のPrivate hospitalであるHopital de Saint Jose Saint Lucに場所を移動して手術・外来が行われています。

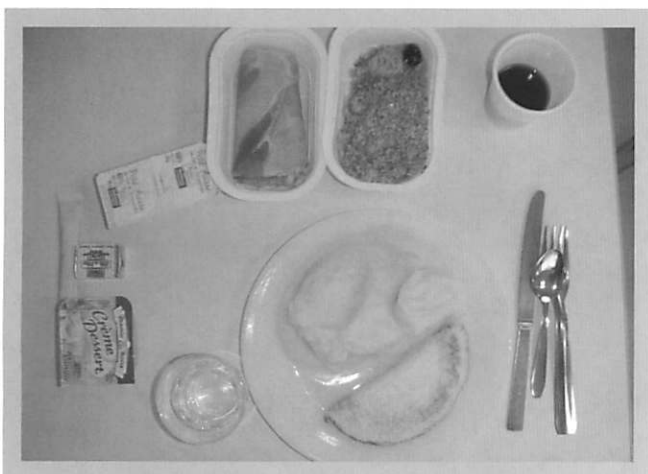
さてDr Catonの使用されていた人工関節はCharnley typeのTHAで大腿骨側は全例フランジ付きCharnleyステムをセメント固定し、臼蓋側はセメントもしくはセメントレスカップを患者年齢によって使い分けてました。

とりあえずそんなこんなで生活がスタートしたわけですが、宿舎は病院の2階に研修医が泊まるスペースがあり、そこには4畳半程度の部屋に簡易シャワーとベッドと机のみがあります。研修医が集まる20畳程度の食堂兼喫茶室のような部屋が近くにあり、そこにテレビが1台おいてあり夜はそこでテレビを見たりコーヒーを飲んだりして過ごします。食事はお昼は食事券を頂き、病院食堂でパラメディカルの方たちと一緒に食べ、夜は病院食が与えられます。お昼の食事はまだしも夜の病院食には閉口いたします。結局、夜は近く

のレストランに行って安いディナーを頼んでワインを飲みながら過ごすのが日課になってしまいました。ワインはすぐ近くがブルゴーニュワインの産地であり、ワインに関してはかなり満足度は高くしかも格安なためついつい飲みすぎて気持ちよく眠りにつくことができます（ちなみにコート・デュ・ローヌのワインが1本700円ぐらいで全く同じものを日本で飲むより美味しいです。やはり輸送するだけで味が変わるっていうのは本当のようです）。

日曜日になるとあらゆる店が閉まってしまいます。繁華街もスーパーのような店はすべて閉まってしまい、結構閑散としていて教会に通う人たちが教会の前に多数集まって何やら楽しそうにおしゃべりをしているという光景を目にします。私は週末は有り余る時間があるため、毎週のようにTGV（日本でいえば新幹線）で近隣の観光地を訪ねていました。少し北に行けばブルゴーニュ公国が栄えたマスタードで有名なディジョンやヴォージュがあります。もちろんこの一帯はブルゴーニュワインで有名な地域です。地名もワインで聞いたことがある名前ばかりです（たとえばニューイ・サン・ジョルジュなど）。食事はエスカルゴやブッフ・ブルギニオン（ブルゴーニュワインで牛肉を煮込んだシチュー）などを堪能しました。さらに南にいけばローヌ川沿いに古代遺跡で有名なオランジュ、ゴッホやゴーギャンの絵画で知られるアルル、さらに南にいけばマルセイユに到着しそこはもうプロヴァンス地方です。マルセイユまで行ってもTGVで2時間程度で金額も往復1万円程度なため、とても気軽に出かけられます。土曜日の朝、リヨン駅から切符を買ってプロヴァンス地方の田舎の好きな町まで車で出かけて、夕方に駅近くのホテルに行って部屋を確保し翌日さらにニースのほうまで足を延ばして海水浴を楽しみ、またTGVで帰ってくるというのが最も楽しい旅のコースでありました。

月曜日から金曜日まで手術の助手をして土日・祝日は主にリヨンより南の地域を旅行する生活を約1ヵ月半ほど続けたところで、少々単調な毎日に飽きてきましたので色々な施設を訪ねてみようと思いました。病院に関する色々な情報を調べて6箇所の施設にメールを送り、アポイントをとり毎週違う施設を訪問しました。その間ホテル暮らしとなるためできるだけ安い（たとえばシャワー・トイレが共同であればパリでも1泊



●病院食

6千円位で泊まれます) ホテルを探して週単位で借りるようにしました。パリでは3施設訪問したため、3週間ほどホテル暮らしが続きました。そのホテルは繁華街のど真ん中にあり、部屋が目抜き通りに面していたため、夜中の2時まで人通りが絶えずとてもうるさくて眠れませんでした(店の前ではお皿を割って客寄せをしており毎日お皿の割れる音に悩まされます)。そこで、部屋を通りに面していない奥の部屋に移してもらったのですが、これがまた窓も何もなく薄暗くさみしい部屋で物音ひとつしません。どうやら中間というのがなく、まあだから安いのだなと妙に納得したりしていました。

パリの近郊に(列車で30分程度の距離) Cretailという町があり、そこにHopital Henri Mondorという大きな病院があります。そこにはDr Philippe Hernigouがいらっしやられて、大腿骨頭壊死症に対して自己骨髄細胞移植を用いた治療を行っておられます。そこでは毎日2~3例の症例に細胞移植を行っており成績も詳しく説明していただきました。欧米の大腿骨頭壊死症はあまり骨壊死の範囲を測定せず、その点では日本の方が進歩しており詳細な検討が不可能ではないのかと若干批判的に受け取って聞いていました。しかし今後トピックとなるべき治療法であるため大変興味深く見学してまいりました。またパリの北西にHopital Universitaire Raymond-Poincareがあり、そこにはDr Judetがいらっしやいました。Dr Judetは人工関節で有名なフランスの整形外科医A Dudetの息子であり、その施設ではMassive allograftを利用したTHA再置換術を見学してきました。Judetの牽引手術台(正式名称は良く知りません)で前方アプローチで手術を行います。外回りの看護師が牽引を緩めたり、伸展内転位で牽引したりと流れ作業の如くテキパキと手術進行度に合わせて行っているのが印象的でした。

折角、東の果てである日本からここまで来たのだから、少し足を延ばしてスイスまで行ってみようと考えてDr Catonに「スイスのベルンのDr Ganzの施設に見学に行ってみようと思うのだけど」と申し出たところ、すぐに電話を掛けてくれてトントン拍子で日時が決まりました。リヨンからTGVを乗り継いでベルンまで約4時間の行程でしたが、ちょうどアルプスの山並みを抜けきれいな湖の横をブドウ畑を見ながら列車が走り、

全く退屈することなく到着いたします。Dr Ganzはベルンの街中にあるInsel Spital(インセル病院)に勤務されており、御高名な先生であるにも関わらず、大変気さくにお話させていただき色々な質問にも気軽に笑いながら答えていただきました。

そこでは臼蓋形成不全に対するPeriacetabular osteotomyとFemoro-acetabular impingementに対するOsteochondroplastyの手術を見学できました。当時は英文雑誌でしかみたことない手術手技であり、このように行われているのだと目から鱗が落ちるような気がして、一生懸命デジカメで記録してまいりました。

さてそのようにして気がつくともう帰国まであと数日間となっていました。最後にリヨンの研修先の病院の仲間達が送別会を開いていただき、是非また遊びに来いと言って頂き大変ありがたく思いました。何も知らない異国の土地からやってきた人間に色んな人が声を掛けてくれて、何か困ったことがない?明日遊びに連れてってやる!一緒にご飯を食べに行こう!などと温かく迎えていただきました。いっぺんでフランスという国とそこに住む国民が好きになり、いつの日かお世話になった人たちにもう一度お礼を言いに行こうと決意して、とうとう帰国の途に着くこととなりました。

最後になりましたが、このような留学の機会を与えてくださった日仏整形外科学会委員の先生方ならびに留守中に診療等におきまして大変ご迷惑をお掛けした医局の先生方に厚く御礼を申し上げます。

2006年フランス研修報告

関西医科大学病院

小室 元 先生

2006年4月から7月の期間に日仏整形外科交換研修生としてフランスのリヨンとパリの病院で研修（stage）を受けることができましたので報告をいたします。

勤務先の関西医科大学附属枚方病院はこの年の1月に新規開院したばかりで勤務3ヶ月での長期渡航は周囲の方々に大変な迷惑と思いつつ、4月に入ると期待にそわそわしながら準備をして、4月10日にリヨンに到着しました。翌11日に早速、研修先であるDr. Jaque CatonをClinique Emilie de Vialarに訪ねました。秘書さんにこれだけは覚えていった「ボンジュール、日本から来たKOMUROです。」だけフランス語で挨拶し、Dr. Catonに面会を求めましたが、秘書さんは彼は何時に来るかわからないから待つようにいわれ、頭の中で指定時刻を間違えたか？など考えながら待つこと1時

間半。ようやくCaton先生にお会いすることができました。でっぴりと貫禄のある無愛想な彼に会い挨拶をしてから、予定を聞くと手術とのことなので、早速手術に助手としてはいらせてもらいました。そしてこの日はいきなり彼一人の執刀でTHA、TKA、外反母趾、TKA、revisonTHAの手術をこなし、続いて夜6時からの予定の外来を大幅に遅らせ（夜8時～）2時間ほどの外来患者診察をこなしたのでした。既に60歳はこえていようかというのにそのエネルギーに圧倒され、ジェットラグと訳のわからないフランス語に囲まれ疲労困憊でその日はベッドに倒れ込みました。このようなペースで約1ヶ月半リヨンに滞在し研修したのでした。Dr.Catonはこの調子で年間300例のTHAを一人でこなしていました。彼はリヨンスクールと称されるリヨン



●リヨン手術室にて

でチャンレー人工股関節を始めたグループに連なる一人で、THAを中心として外反母趾やTKA、UKA、HTOなど関節外科全般を手がけています。また小児整形外科医でもあり、当時はリヨンで2番目に古い病院のCentre Hospitalier Sant-Joseph-Sant-Lucの部長も兼任されていたので小児の脚延長手術なども見学することができました。

あっという間に6月になり次はパリのHopital Cochin Department of Orthopaedics Surgery Service Aに移りました。ここではPr. JP Courpiedの指導のもと、主にTHAを中心に手術に入らせてもらいました。Kerboull ringを使用したrevision症例などバラエティに富んだ手術を見学することができました。リヨンではCaton先生につきっきりでしたが、Cochin病院ではスタッフの先生方それぞれの手術に入ることができ、カンファレンスの参加など大学病院の雰囲気でした。フランス語ははまだemergency wordしかわからない私は英語のできるDrや研修医のそばにつきうるさげられない程度に質問するようにしていました。Pr. Courpiedは手術中ずっとしゃべりながら手術されているし、カンファレンスでもずっと何をしゃべっているのかあとで研修医に聞くと助手に付いている研修医や学生にすべて説明しながら手術をしているのだといわれ、若いDrへの指導の熱心さに感銘を受けました。また毎週金曜日には朝1時間ほどパワーポイントでの発表が学生、研修医などから行われ、プレゼン技術の研鑽も行われているようでした。

フランスの病院では、旧植民地（北アフリカなど）など移民系のスタッフも多く、例えばリヨンの

Clinique Emilie de VialarでDr. Catonの第一助手を務めていたのはアルジェリアからきている血管外科医でした。とても親切な彼は病院で働いている実績をつめばフランスでの就労許可証がもらえるのだと話していました。医師不足は日本と同様で第2助手は医学生（Etudiant）でしたが、彼らは医学生2年の最後に試験に合格し3年になると看護師と同等の資格があるとみなされるそうです。そのためバイトとして給料をもらいながら手術助手を務めていました。実習と実収入を兼ね、卒業するころには日本の研修医の手技はこなせるようになっていそうです。日本でも役立つようなしくみですよ。また、Cochin病院では各国から研修医（Enterne）が来ていましたが、私のいた頃はアルジェリア、モロッコ、チュニジア、レバノン、ギリシアから来ていました。移民系、外国人は病院スタッフ、中堅までの医師には欠かせない労働力と思われました。実際、TVでは数チャンネルはアラブ系の番組があり、パリでもリヨンでもケバブや北アフリカ料理の店があふれていました。またEUに統合されてから、ヨーロッパではあらゆる分野で統合がすすんでいるようで、加盟15カ国、加盟希望11カ国の間で医師の移動が自由に行えるよう、また医師資格取得のための養成期間を6年間、研修期間を2年とさだめているようです。Cochin病院ではスロバキアの整形外科医がユニセフ勤務の奥様の転勤にしたがって一緒にきており、あまり知る機会のない中欧の整形外科医療の現状をいろいろ聞く機会がありました。少なくとも人材面では急速にグローバル化がすすんでいるようでした。我が国では病院で外国人が働いている光景はほとんど目にするこ



●サントロペのカフェにて



●パリ研修医、アルジェリア

とがありませんが、医師不足が声高に言われる現在、考えさせられる光景でした。

フランスではすでに医学生70%が女性であり、本邦同様に整形外科医希望者は少ないとのことでした。Pr. CourpiedもDr. Catonも若い整形外科医が少なくなっていることに危惧を抱いていると異口同音にいわれていました。また彼ら若い世代には英語教育が行き届いているようで、割と話せる人が多いと感じました。

整形外科医は手術治療が中心で、保存的治療をやる機会はありません。日本では見慣れたヒアルロン酸の関節注射も外来では一度も見る機会がありませんでした。人工関節中心の病院だったせいもありますが、かなり初期のOAも積極的に人工関節手術の適応となっており、手術手技研修に専念できる分、トータルに患者を診る意識のある日本との差を感じました。パリ滞在中はCochin病院のRheumatologie AのPr.Kahanの外来も見学させてもらいましたが、ここでは腰痛や関節痛の患者を丁寧に診察し、まさに日本で一般整形外科外来をされていました。見学の最後に彼が言っていたのは「Who is the patient?」、整形外科医は患者をよく見ないですぐ手術してしまう。と苦言を呈していました。

またパリ滞在中に研究テーマの一つである高齢者医療の現場をgeriatric hospitalであるHopital Brocaで見学しました。日本との大きな違いはプライバシー重視のためほとんど個室でした。しかしその病院の医師が語ったところでは身よりのない老人が多く誰が世話をするのが大きな問題とのこと、日本の現実と共通の問題がありました。またパリは世界でも最も美しい街だが、高齢者にとっては実に住みにくいところだとのこと、見直してみると確かに狭い階段だけのアパートマンや石畳と段差の街には脚の悪いお年寄りには住めないとわかります。街の景観を重視するため障害者対応は遅れているとのことでした。

雑多な文になってしまいましたが、異文化比較することで現在の状況を見直すことができたというのは貴重な経験です。日本ではまだまだ少ないUKA手術はヨーロッパでは膝人工関節の約20%を占めることから帰国してからは積極的にUKA手術に取り組むようになりました。また高齢者予防医学への取り組みもその必要

性をあらためて感じて現在大腿骨頸部骨折の予防のヒッププロテクター開発研究を進めています。

週末にはボジョレー、ブルゴーニュ、ペルージュ、アルプス山麓のアヌシー、美しいプロヴァンスの村々、モンサンミッシェルなど郊外に出かけ、リヨネーズ料理、パリの様々なレストランを楽しみ、ドイツワールドカップをリアルタイムで観戦し、dutyのない日々がこんなに楽しいものかと思いつつ堪能して（スイマセン。）帰国しました。

帰国の1週間前、仲良くなったEnterneのDr.Firasが来月母国のレバノンに休暇で帰国するとうれしそうに語っていました。ところが帰国前に訪れたモロッコでイスラエルがレバノンに侵攻し空爆と激しい地上戦が開始されるニュースがながれていました。彼の帰国は？それよりも彼の家族はどうなったのか？消息はもう聞く機会はありませんでした。なぜフランスで研修しているのか訊いたことがありました。彼は母国ではあまり仕事がない、安定して勉強ができないからとしんみりつぶやいていました。

留学研修はお金も労力も要しますが、日常生活と仕事を見直し次につなげるにはまたとない機会だと思います。帰朝報告を見て興味をもった先生にはどんどん行っていただけたらと思います。お手伝いできることはさせていただきます。

最後にこの機会を与えていただいた日仏整形外科学会とお世話をしてくださった大橋先生、瀬本先生、また研修の猶予をあたえていただいた飯田教授と同僚の皆様へ改めて感謝をいたします。ありがとうございました。

フランス研修後記

総合せき損センター整形外科
益田 宗彰 先生

はじめに

平成19年度日仏整形外科学会交換研修プログラムの研修医として、2007年12月1日から2ヶ月間、フランス、パリ14区の Institut Mutualiste Montsouris (通称L' IMM)にて、整形外科(特に脊椎分野)の臨床研修を行わせていただきました。当初学会からは、ニースで側彎の研修を、というお申し出を頂戴しましたが、現在の自分の仕事の内容から、小児よりもやはり成人の脊椎疾患を勉強させていただきたいと、色々わがままを言わせていただき、今回の研修先の決定となりました。同病院はパリ南部の14区に設置された、MFP (Mutualite Fonction Publique) と呼ばれる共済組合連合会が運営する公的病院であり、病床数は418床、うち整形外科は56床という、中規模の総合病院です。すぐ隣にパリ国際大学都市があるため、かつては同地でHôpital

International de l'Université de Parisという名称で運営されていましたが、1991年より現在の建物に新築され、併せて名称もその所在地から現在のものとなったそうです。建物は歴史を感じさせる建築物が多いパリ市内としては、かなり斬新な印象の、前面総ガラス張りという近代的な作りとなっており、病院内もアメニティをはじめ、まだ真新しく清潔な施設、という感じでした(写真1)。病院のお隣には Montsouris 公園という広大な公園があり、季節は冬でしたが、天気の良い日には、広々とした緑地で国際大学都市の留学生やパリ市民がくつろいでいる姿が見受けられました(写真2)。

研修生活

今回の研修を受け入れてくださった、同病院整形外科の Christian MAZEL 教授は、椎弓根スクリューの生み



●写真1



●写真2

の親である、Raymond ROY-CAMILLE教授の直系のお弟子さんにあたり、パリでも著明な脊椎外科医でありました。脊椎手術に対する姿勢や考え方は、決して奇をてらわずに「しっかりとしたopenでの除圧と、確実に強固な固定」をモットーとしておられ、最近殊に日本でもてはやされるようになりつつある、鏡視下での最小侵襲手術や、頸椎の椎弓根スクリューには反対である、という立場をとっておられました。これは日本における我がせき損センターの立ち位置ともがっちり同じであり、そのことをお話した研修開始早々より、MAZEL教授と意気投合することができ、その後の研修が非常に楽しいものとなったのは、自分にとっても幸運なことでした。また、教授はご自身も何度も来日のご経験がある、非常な親日家であり「日本人の奥ゆかしさと礼儀正しさは素晴らしい！日本のどこに行っても音楽のように「ありがとうございます」という言葉が溢れている！」と話しておられました。その後私が特に「礼儀正しく奥ゆかしい」日本人の見本のようにして行動するように心がけたのは言うまでもありません。手術中には日本語の表現に関する話題が尽きず、最後には私が「Merci」と言えば教授が「ドウイタシマシテ」と返してくださるようになりました（写真3）。

整形外科のスタッフはMAZEL教授と、若手の脊椎外科医であるDr. BALABAUDの2人が脊椎手術を主に行い、膝関節外科医のDr. GUINGAND、股関節外科医のDr. De THOMASSON、足部・外傷専門医のDr. TERRACHER、肩関節外科医のDr. CONSOの計6名に、3名のレジデン

トの計9名で構成されており、年間約2000例の手術件数を、2台の手術台をフル稼働させ、一日平均7~8例の手術でこなしていました。

もちろんメインは脊椎の手術を見学、あるいは手洗いをして見せていただくわけですが、やはり圧巻はROY-CAMILLE直伝の手術テクニックです。椎弓根スクリューの刺入に際しては、通常我々がペディクルプローブを用いて作成する下穴を、電気ドリルで作成してゆきます。無論長管骨にスクリュー穴を作るようにガーッと回すのではなく、非常にゆっくりと、先端が骨の中を通過してゆく感触を確かめながら徐々に回してゆくのですが、それでも脊髄や神経根の付近を回転工具が通過してゆくことに本能的な恐怖を感じずにはいられません、何かコツは？と尋ねれば、こともなげに「only feeling！」とのお返事。これを変性疾患はもとより、回旋の激しい側彎の症例にも、イメージも使わずに淡々と行われる姿を、毎日ひたすら感心しながら見ていました。もうひとつのテクニックは、椎弓切除をレスプロソーを用いて行う、というものです。これまた先端の鋭い振動工具を用いて骨切りを行うわけですが、本能的恐怖を感じる、ということにかけては先の方法と大差ありません。感覚的にはギプスカッターでギプスを切るようなものですが、こちらもコツは？と尋ねますと、やはり「only feeling！」とのこと。脱帽でした。しかしこのようなことをしていると、やはりご想像の通り、ときには硬膜損傷を合併します。滞在中に何度か水漏れ事故に遭遇しましたが「こんな



●写真3

のはrepairしやすいところが切れてるだけだから何も問題ないよ！」と、あっという間に硬膜縫合を終えておられる姿にも改めて脱帽でした。帰国直前には「これだけ見たからオマエももうこのテクニックが使えるはずだ、日本に帰ったらまずCadaverで練習しなさい」と真顔で言われ、すみません、日本ではCadaverを使って模擬手術を行えるような制度は確立していません、という言葉なぜか言い出せず、気がつけば「Oui」と返事をしていました。さらに日本と違う点は、腹臥位手術をJudetの牽引手術台を用いて行う、ということでしょう（写真4）。Judetの手術台は、通常日本で見られる牽引手術台と異なり、下肢を牽引したまま挙上することが可能なため、腰椎に前彎をつけることが可能であり、高度の迂りの矯正や、矯正骨切りの際に威力を発揮していました。ただひとつ心配だったのは、日本と違い、100Kg超級の患者さんが多いため、長時間の手術になると恥骨部に褥瘡を作るのではないかと、ということが気になりました。

病院における私のポジションは、やはりあくまでも「お客さん」であり（滞在期間が短いため致し方ありませんが）、通常の病棟業務を見る機会にはあまり恵まれませんでした。基本的に月曜日から金曜日まで、朝から手術室に詰めっぱなし、という感じです。月曜日は夕方術前カンファレンスが行われ、時には夜8時過ぎまでかかるのですが、それ以外は手術が終わると「好きにしてよい」という感じでしたので、脊椎以外の手術を見学させてもらったり（一番多く見せていた

だいたのは、Dr. GUINGANDのTKA（PTG）でした。後述するモロッコ人のレジデントが術中に倒れた時には、急遽前立ちをさせてもらったり、彼自身の性格が非情に陽気なこともあって、なかなか楽しい思いをさせてもらいました。）、MAZEL教授の外来を見せていただいたりしていました。面白いのは、決してフランス語が分かっているわけではないのですが、脊椎疾患の外来に来る患者さんというのは、やはりどこも同じという万国共通というか、断片的に分かる単語や話のニュアンスから、おおよそどういったことを話しているか、ということがなんとなく理解できる、ということでした。例えばLCSの術後の方が「先生！非常に調子が良くて、スーパーに買い物に行くのもとても楽になりました！もう足は全然痛くないです！」などとフランス語で言っていることを、あとで教授が教えてくれるわけですが、「はい、よく分かりました」と言うとおお！オマエはもうそこまでフランス語が上達したのか！？と驚かれたり、完全予約制で非常にゆっくりと時間が流れる外来で、いろいろと教えていただきながらも、楽しいやり取りを交わすことができていました。

整形外科のレジデントは前述のごとく3名で、生粋のフランス人が1人、モロッコ人が1人、彼は元々眼科医志望だったのに、眼科のレジデンスの枠がないため、やむなく整形外科に回ってきたとのことで、どうもあまりやる気がないのか、術中にしょっちゅう怒られている姿が印象的でした。また、モロッコにはシエ



●写真4

スタ（午睡）の習慣があるため、昼食後は眠く、朝は空腹で元気が出ない、夕方腹が減ってダメ、いちばん幸せで元気が出るのは昼飯の時、と、一体キミはいつ働いておるのか？ という感じでしたが、性格は非情に温厚で、滞在中もとても仲良くしてくれました。

ただ1人のシニアレジデントのDr. HANSENは、ロシア系ルクセンブルク人で柔道4段、元はコックをしていたという変わり種でした。体格も大きく眼光鋭く、さながらハリウッド映画の敵役みたいでしたが、実際にはその強面とは裏腹に非常に親切な人物で、私と年が同じで脊椎外科を志望、ということもあり、滞在中はなにくれとなく世話を焼いてくれました。クルマの運転が大好き、と言う彼の暴走車に乗って、彼のガールフレンドと食事に連れて行ってもらったり、個人的によい友人関係を築くことができました。現在もメル友関係が続いており、近い将来、チャンスを作って、日本にも勉強に来てもらえれば、と思っています。

ARGOSPINE SYMPOSIUM

今回の滞在中でラッキーだったと感じることは、帰国直前にMAZEL教授が会長を務めたARGOSPINE INTERNATIONAL SYMPOSIUMに参加できたことです（写真5）。ヨーロッパ人のディベート好き、という姿を目の当たりにし、同時に日本ではまだ行われていない頸椎・腰椎の人工椎間板手術やDynesysを用いた制動術に関するセッションを聴くことで、学問的にも非常に勉強になりました。日本からの参加者も結構多く、金沢の富田教授をはじめ、日本の脊椎外科の名

だたる先生方と、自分の立場もわきまえず、久しぶりに日本語で整形外科のお話ができただけでも、自分にとってはよい刺激になりました。惜しむらくは「来年はぜひ演者で参加しなさいね」と言われましたが、よい演題が思いつかなかったことと、これ以上長期の休みが取れないため、泣く泣く今年の参加を諦めたことです。この場をお借りしてMAZEL教授に陳謝させていただきます。

帰国前に感じたこと

出発前は長く感じられた研修期間でしたが、病院に行き、毎日自炊し（折しも折り、ユーロ高の影響をモロに受けました）、休みの日は美術館荒らしとプール通いに明け暮れる（どこに行っても趣味だけは欠かさない、というポリシーのもと、パリ市内の室内プールを探し回りました。おすすめるはモンパルナスのショッピングモール地下のPiscine Armand Massardです）うちに、出発前にはかなり短かく刈った髪の毛も伸び、あっという間に2か月が過ぎてしまいました。年末年始の休みを利用して、無謀にも一人でユーロスターに乗り込み、大したアポイントも取らずに、せき損センターのモデルとなったイングランドのStoke Mandeville病院を訪問（写真6）したり（大層迷惑がられました、それでもちゃんと案内していただきました）、2007年夏に当センターに研修に訪れたDr. BREITELの勤務先である、Hôpital Beaujonを見学させてもらい、彼とBeaujon初(?)の頸椎laminoplastyを行ったり、意外にも自分に行動力があるものだ、ということを確認



●写真5



●写真6

させてもらった、思い返せば密度の濃い毎日でした。L'IMM最終日には、整形外科のスタッフと、手術室のスタッフから「準備や片づけもよく手伝ってくれたお礼に」と、ささやかながらケーキとシャンパンでお別れの会を催してもらい、ちょっと涙腺が緩みました（写真7）。あれほど自分にとって違和感のあったフランス語やパリの街並みも、いざ後にするとなるとなにより感慨深く、「また長期で来れるようなチャンスがあれば、それはそれでいいかも・・・」と思いつつ、帰国の途についた次第です。

2ヶ月間の研修で得られたことは、むろん（ささやかながらも）知識であり、現在自分が就いている脊椎外科の歴史（特に現代脊椎外科のテクニックの基礎となったもの）であり、同時にフランス整形外科のエッセンスであったと思います。（もちろんあまりにも短い期間で、得られたものとは言ってもたかが知れてはいますが・・・）今回の経験をもとに、また自分の日常診療の中で、また新しいものをフィードバックできるように努力したいと痛感しました。余談ですが、フランスから帰国して一番変わった（役に立った）のは、椎弓切除の際にノミを使うことに対して、「ボーンソ

ーよりは絶対安全！！」と、今までのように躊躇することがなくなったことではないかと思います。

■ 謝辞

本稿の締めくくりにあたり、今回のフランス研修のそもそものきっかけを与えてくださり、長期の不在にも関わらず「勉強なんかどうでもいいから楽しんできなさい」と、お餞別まで添えて快く送り出してくださいました、上崎典雄総合せき損センター前院長に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。また、芝啓一郎総合せき損センター院長をはじめ、留守を守ってくださいました、総合せき損センターのスタッフの先生方、せき損センターの先輩でもあり、当学会の役員として、渡仏に関するコーディネーターを務めていただきました弓削至先生、MAZEL教授と年来の知己であり、今回も何かとお口添えをいただきましたお父様の弓削大四郎先生、このような素晴らしい機会を与えていただきました、日仏整形外科学会の世話人の先生方皆様に、重ねて厚く御礼申し上げます。



●写真7

日仏交換研修帰朝報告

滋賀医科大学整形外科
菊地克久先生

私は2007年日仏整形外科学会交換研修で9月から11月までの三ヶ月に渡りフランスの病院見学をさせて頂きました。

前半のグルノーブルはスイスやイタリア国境に接するローヌ・アルプ地方（リヨンも属する）にありフランスの南東部、アルプス山脈の麓に位置します。パリからTGVで約3時間、リヨンからは急行で約1時間半かかります。周辺に多くのスキー場があり、1968年には冬季オリンピックの舞台になり（最近では映画「クリムゾンリバー」（主演ジャンレノ）の舞台）、出身有名人にはスタンダール（「赤と黒」を著した文学者）、アンドレ・ザ・ジャイアント（プロレスラー）がいます。街の中心をイゼール川という大きな川が蛇行しながら流れ、周りを山々に囲まれた、静かで緑が多いところです。宿泊施設の周りにも芝生が張られた公園が至る所にあり色んな花や樹木が植えられ、少し離れた所には自然のままの林が多数残っていました。観光名所としては5つに連なったシースルーのシャボン玉のような丸いロープウェイが有名で、市街から川を越えて約300m上まで5分で一気にバステュー城塞へ昇っていきませんが、途中や展望台から見渡す街のきれいなことといたら絶景です。人口約15万人

（市、都市圏としては50万人）の中型都市で、市街電車が発達し、中心部は大学などが多いせいか学生（特に女子）がかなり多い感じを受けます。日本にもあったスーパー（SPAR）や、MONOPRIXやGaleries Lafayette、ショッピングモールなどがありました。日本との関係ではサッカーチームに以前大黒将志や梅崎司が所属し、現時点でも中京高の伊藤翔が所属しています。但し日本人は留学生だけで数十人位と本には記載があったのですが、

見かけるのは稀でした。

研修先の大学病院であるAlbert. MICHALLON病院はグルノーブル駅から東へ路面電車で10分程の所に位置し、地上15階地下2階建てで2000床もある市で中核の総合病院です。整形の病棟は約80床あり、教室は主任教授のMerloz先生を含め7人の医員と5人のInterneのメンバーです。カンファレンスが毎日朝8時前からあり、看護スタッフも含め20人以上が集まってきます。手術は整形外科専用の手術室が3部屋あり朝8時過ぎからフル稼働で次々と手術がされていきます。予定手術は毎週30例以上で主に股・膝関節（股関節鏡が結構多）、足部（外反母趾に対しScarf手術が数多く施行等）、脊椎、小児整形に渡って施行され（スポーツ整形の関係は別の病院に集まっていた）、更に外傷の患者も続々入院する為、追加で大腿骨頸部骨折や脊椎圧迫骨折（vertebroplasty）等の骨折の手術も毎日のようにされていました（写真1）。



●写真1 Albert. MICHALLON病院前にて

Merloz先生は前々回の京都で行われた日仏整形外科合同会議でも来日されていましたが、ナビゲーション手術の経験が豊富で、Computer-assisted surgeryの為の研究所を別に持っておられ、SOFcotでも筆頭編集や講演、座長等をされています。又側彎症、脚延長など小児整形外科疾患の患者さんも多く、Ilizarov法の研究もされています。脊椎や人工関節のナビゲーションによる手術や創外固定を見学させて頂きました。それらの結果は最近でもComput. Aided. Surg., Rev Chir Orthop Reparatrice Mot., SOFCOT, Am J Sports Med.の発表などに多数見られます。人柄はカンファレンスで厳しい指摘をされている一方で、温厚な方で手術室でも冗談をよくおっしゃり、私にも優しく接してくださいました（写真2）。

後半のリオンはグルノーブルと同じローヌ・アルプ地方の中心都市でTGVではパリから1時間半で到着する位置にあり、フランス第三の都市として繁栄しています。リオンには3つの顔があり、ひとつはビストロやアンティーク・ショップや市が立ち並ぶヴィュー・リオン、もうひとつは美しい大通りや劇場・ブティックがあり18世紀の面影を残すダウタウン、そしてナイトクラブやレストランが賑わいパリのような輝きを放つこともある夜の街の3つです。ソーヌ川とローヌ川という2本の大きな川を中心に区分されます。歴史はローマ帝国時代の2世紀にさかのぼり南北ヨーロッパを結ぶ拠点として栄え、ローマ劇場など当時の遺跡も数多く存在します。古くは絹織物・印刷産業で栄え、エルメスの高級スカーフなど有名なデザイナーはこぞってリオンの生地を使うそうです。又皆様もご存じの世界的に有名な食の街で、ポール・ボキューズなどミシュラン星付きレストランが数件あり

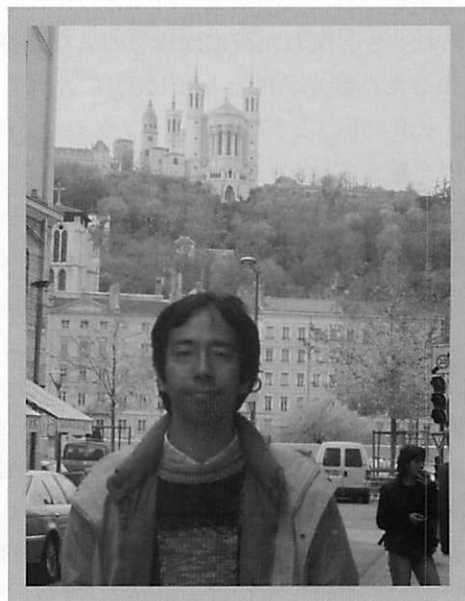


●写真2 Merloz先生（SOFcotにて）

ます。そのような高級レストランには子供連れでは入れませんでした。庶民向けのレストランでもかなり堪能できました。通りを歩くとたくさんのギャラリーやブション（地元の人はビストロの事をこう言います。その数なんと800!）に行き当たります。クネル（魚や野菜をつみれ状にしたリオン名物）、ココンやクッサン等の名物菓子などもそれぞれ専門店で綺麗に並べられ手頃な価格で販売されています。夜の訪れと共に町は光の中に浮かび上がり、フルヴィエールの丘のふもと、1万の灯りに照らされた教会・広場・橋などイルミネーションが眩しく照らし出されていました（写真3）。

研修は駅から歩いて10分位にあるClinique Emillie de Vialarという個人病院で、その所長のJaques Caton先生に主に師事させてもらいました。施設は2階建てで1階は外来と手術室（5部屋）、2階は入院部屋になっており、研修は主にCaton先生の外来と手術を見学し、先生の出張等の時は他の先生の手術を拝見させて頂きました。Caton先生は昨年9月のニースで行われた日仏整形外科合同会議の主催幹事で御存知の方も多いと思いますが、仏整形外科学会の理事で、SICOTの役員もされている多忙な方です。股膝関節専門でTHRは4000以上の臨床経験があり、Charnley型THAの改良版を主に使用されています。

（THA後の長期耐久症例のギネス記録を持っておられるとの事でした。）特徴はnon touch techniqueを徹底的にされ、術前の手洗いもかなり入念にされて三重手袋の外側の手袋も術中に何度も換えられ、創縁の表面に負担の



●写真3 フルヴィエールの丘をバックに

かからないように布を縫着してからリトラクターをかけておられました。他に膝、足も専門にされ、TKAや外反母趾・イリザロフ創外固定など色々手術されていました。彼の手術専属の看護師がいて1日中その方も連続で一緒に手術されていました。朝最初の手術は7~8時に執刀が開始され午後4時位まで縦に数件（人工関節4~5件+足のope数件等）の手術が行われ、夕方から夜診のようなものが始まり午後9~10時頃に終了、というのが手術の日のパターンでした。その他にもDejour先生は膝関節専門の有名な先生で関節鏡等を日に10件位されていました。私には「サムライ！アチョー！」等と毎回挨拶してくれ、関節鏡でgood positionにドリルが入れば大声で「マニフィック！（完璧）」と陽気に手術をされる方でした。他の先生もそれぞれ曜日に腰椎固定、肩腱板、足等の手術も多数されており、それぞれ見学させていただきました。慣れてきてからは少し手洗いもさせて頂けるようになり間近に手術を観察できました（写真4）。

フランスの股関節外科の特徴としては成人の機能再建に対して骨切り術は全く行われず、人工関節のプロステシスに関してはセメントレスタイプが半分、セメントタイプとハイブリッドタイプがそれぞれ四分の一で（2006フランス整形外科の統計による）、輸入されたプロステシスをそのまま使用することはなくカップやモデュラーネックなどを加えてフランスで製造した改良型を使用していることがしばしばみられました。私の訪れた両病院ではMISにはあまりこだわっていない方針で、特にCaton先生は長期成績の方が大事で今のMISには魅力を感じないとおっしゃっていました。関節外科に限らず非常にsystematicで手術器械が少なく短時間で出血量も少な



●写真4 Jacques Caton先生（この部屋で外来もされています）

かったです。まだ私が見たことが無い、或いは日本に輸入されていない有用な手術道具が多数あり参考になりました。

フランス語については出発の1年前から日本で勉強を開始しましたが多忙にてなかなか（今は破産してしまった）NOVAにも行けない状態で訪仏してしまい、日常は仏語でほとんど話しかけられましたが簡単な会話位しか判りませんでした。しかし手術など詳細について英語で質問すればきちんと答えて下さり、日常生活でも乏しい語学力と英語及びジェスチャーで何とか会話が成立して、フランス人の寛容さに感謝しました。Bonjour！等のあいさつは全くの他人でも出会えばほとんど必ずされ、自己主張はされますが譲り合いの精神も共通してあって、日本の精神と異なるフランス・エスプリの精神にも影響を受けました。又後半のリヨンでの滞在時期は10月後半から11月末と秋から冬にかけての時期で気候的に寒く、ストが多い等慣れない生活自体に色々苦勞の連続でしたが、今から思えば良い人生経験をさせて頂きました（写真5）。

この3カ月間に日本には決して得ることができない整形外科に関する知識を得、多くの師や友人を得ることができた事は私にとって一生の財産になるものと思います。最後に3ヶ月間快く送り出して下さった松末教授含め滋賀医科大学整形外科教室スタッフ、今回留学するにあたって大変御世話になりました瀬本先生、藤原先生、大橋先生、ジラン敬子さん、又このような有益かつ貴重な研修の機会を与えていただいた七川名誉会長、小野村会長その他日仏整形外科学会の諸先生方に重ねて御礼申し上げます。



●写真5 当時ラグビーワールドカップが行われ駅前でも宣伝されていました

日仏交換研修記－リヨン・パリ－

京都府立医大大学院運動器機能再生外科学

上島 圭一郎 先生

平成20年1月2日から2か月間、フランスのリヨン、パリで研修をさせていただきました。京都で開催された第12回日仏整形外科学会に、日仏整形外科学会のフランス側の会長であるCaton先生が来日されました。その際にCaton先生と面識を持ったのをきっかけに、フランス整形に興味を持ち本研修に応募させていただきました。

平成19年12月31日に日本を出発しました。飛行機の出発が悪天候により4時間遅れ、パリでの乗り継ぎも4時間以上遅れたために、リヨンに到着したのはフランス時間でまさに新年を迎えようようとしている1日の午前零時前でした。新年を向かうために街中に響き渡る車のクラクションの音の中、ホテルにチェックインしました。

最初の研修先はCaton先生がいらっしゃるClinique Emilie de Vialar (写真1) でした。ここは整形外科と

形成外科の専門病院で、整形外科医は上・下肢関節外科、脊椎外科などの専門医11名をそろえ、ベッド数は80床ほどですが年間の手術件数は整形外科だけで1,000件を超える症例数があります。Caton先生は主に変形性股関節症、変形性膝関節症に対するTHA、TKA、UKAや外反母趾手術、イリザロフ創外固定器を用いた脚延長術などを中心に週に10例程度手術をされていました(写真2)。THAは30年近くCharnleyタイプのインプラントを使用しておられ、術後25年を超える良好な長期成績をこれまでに報告されていました。研修期間の1か月のあいだにTHA、TKA中心に30例以上の手術に手洗いして入れて頂き、直接Caton先生から手術手技についてご指導いただくことができました。手術は通常、Caton先生と他の病院から手伝いにくるアルジェリア人のDr. Mohamedと医学生と専属ナースの4人チームで行われていました(写真3)。Dr.



●写真1 Clinique Emilie de Vialar



●写真2 Dr. Catonと一緒に

MohamedがCaton先生の手術の手順やセッティングなどを私にいろいろと教えてくれたのですが、なんと彼は整形外科医ではなく外科医であることに驚かされました。時にはDr. Mohamedが自分の手術があるため、来るのが遅れるとこともありCaton先生と私と医学生の3人で手術が始まることがありました。THAではインプラント固定にはセメント使用して、最後にしっかり関節包を完全閉鎖しても閉創までに1時間もかからずに終了してしまい、伝統を基に熟練した匠の技を感じました。しかし、ただ同じことの繰り返しではなく、独自にインプラントのmodifyもされており、最近では独自のセメントレスタイプのカップの作成や、海面骨をインパクトして骨を温存するような工夫を加えた大腿骨用ラスプ、塞栓症予防のためのセメントエアプラグなど独自の開発も重ねておられました。膝では通常のTKAに加え、UKAや私も初めて見たPF

Arthroplastyなどもオリジナルのものを使用されてきました。膝に使用するインプラントには“HERMES”というなんともフランスらしい名前が付けられていたのが印象的でした。また、週3回の外来も見学させていただきました。診察室はアンティークな家具が配置された独特の雰囲気があり、紹介で受診された患者の手術が毎回多く予定表にと組み込まれていました(写真4)。フランス語での会話の内容は理解できないことが多かったのですが、Drも患者も治療に関してお互いにはっきり意見を言いながら治療方針が決まっていく様子は私にとって大変興味深いものでした。手術日の外来は夜9時や10時頃までかかり、その合間をぬって病棟回診されるCaton先生の姿に私は敬服しました。さらにCaton先生は週末になるとフランス国内外の学会や教育研修会などへ講演に出かけられ、ご自身の主催予定の学会準備などの仕事にも大変忙しくされていました。

Caton先生の手術日以外にはDr. Godenecheの肩関節やDr. Raynaudの膝関節の手術もたくさん見せていただきました。肩関節では想像以上に鏡視下手術が多く、また日本では見慣れないReverseタイプの人工関節置換術も見ることができ大変有意義に過ごすことができました。

ご多忙な中、1ヵ月ものあいだ私の相手をしていただいたことをCaton先生とお世話になった秘書のかたを始め病院スタッフには大変感謝しております。

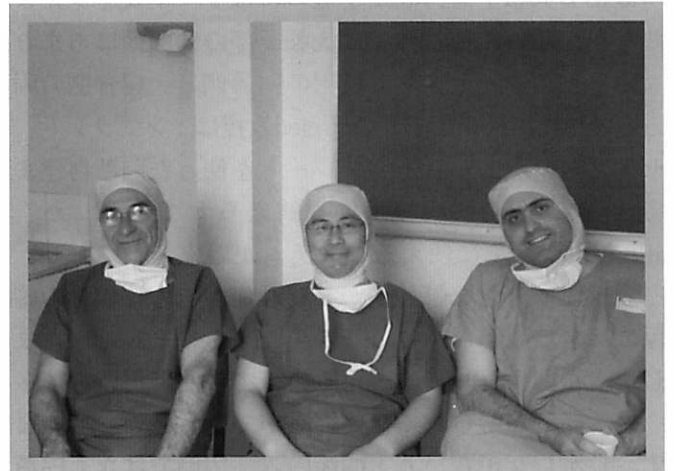
次にパリ市内の第14区にあるCochin病院でCourpied教授の下で研修を受けさせて頂きました(写真5)。Cochin病院では整形外科はService AとBの二つのユニットに分かれておりService AはCourpied教授が主任



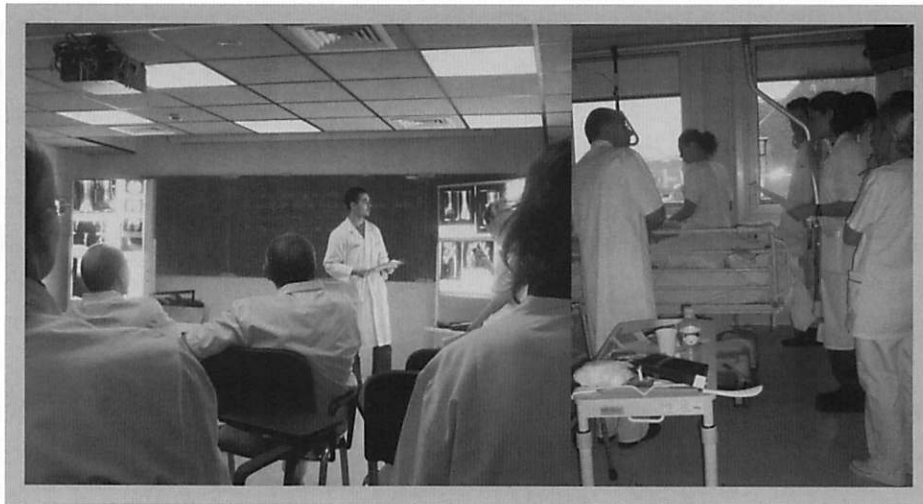
●写真3 Dr. Catonの手術スタッフと



●写真4 Dr. Catonの診察室



●写真5 Courpied教授と手術後のひととき



●写真6 外傷カンファレンスと病棟回診

教授を務められており、主に股関節を中心に下肢の人工関節手術を担当しています。Service Bの方はAnract教授が主任教授を務められ、腫瘍を専門とされています。両方のユニットを合わせて年間約700～800件のTHAと200～300件のTKAが行われていました。THAはセメント使用のCharnleyタイプのインプラントが基本でした。病院の歴史は古く1969年からTHAは行われおり、外来では術後20年程度経過した患者が数多く定期受診していました。このため術後長期経過してゆるみをきたした症例の再置換術が多く行われているのも特徴でした。特に臼蓋側の再建には以前主任教授を務められていたKerboull教授が作られた十字再建プレートが多く用いられていました。ここでも数多くの手術に手洗いして入ることができました。通常のTHAでは外旋筋群を切離せずに大転子部を骨切りして展開するアプローチが基本でした。不慣れな私には軟鋼線3、4本ほどで大転子を再固定するには少々不安を覚えました。聞いたところでは大転子部の偽関節はあまりないそうです。セメント使用の臼蓋側と大腿骨側の両方のTHA再置換術でも、Courpied教授はインプラント、セメントの除去から十字プレートを使った臼蓋再建まで行っても3時間程で手術を終えられていました。allograftがすぐに使えるシステムが確立されており、臼蓋再建で大きな骨移植が必要な症例でも移植骨の確保には全然問題ないところが少々うらやましく思えました。私個人としては、再置換術での臼蓋再建を数多く見る機会が得られて良い経験ができたと思っています。しかしながら、人工関節のみ一辺倒ではなく臼蓋

形成不全症に対しての柵形成術や骨切り術などにも入ることができました。

Cochin病院は大学附属病院でもあるため、臨床実習の学生も数多くいました。外来実習や手術、当直業務にもインターンとともに入っていました。毎朝7時45分から開始されるService A, B合同の外傷カンファレンスでは学生が当直帯の入院患者や前日行われた外傷の術後報告を行い、病棟の教授回診でも学生が主に症例のプレゼンテーションを行っていました（写真6）。フランス全体の傾向だそうですが、ここでは医学生全体の7割が女性で占められていました。そのため今後、フランスでは整形外科をはじめ外科医の確保が将来の問題になる可能性があるようでした。週2回行われる手術の症例検討会では、患者自身が検討会の場に来てCourpied教授が実際に診察も行って検討が行われていました（写真7）。



●写真7 手術症例検討会

パリでの寝泊まりは病院内にある本来インターン用の宿直室のような部屋をお借りして生活していました。部屋にはトイレもシャワーも完備されており、個人的には結構快適に過ごすことができました。滞在最後の1週間に、順天堂大学長岡病院からアイルランドへ1年間留学中という本間先生が金子教授の紹介でCochin病院に見学に来られました。久々に日本語の通じる人との出会いで嬉しかったのを思い出します。本間先生は最初のうちは病院近くのホテルに滞在していましたが、途中から私の部屋で同居することになり、まさに合宿生活のような感じで研修生活を送りました。夜は遅くまでワインを酌み交わして、私にとってフランス最後の週を気楽に楽しむことができ本間先生には感謝しております(写真8)。

休日には、リヨン滞在中はブルゴーニュ地方へワインカーヴ巡りに行ったり、湖の美しいアヌシーへ出か



●写真8 本間先生との夕食



●写真9 サッカー観戦(パルクデランス)

けたりしました。パリではベルサイユ宮殿や凱旋門、エッフェル塔、ノートルダム寺院、モン・サンミッシェルなどの観光名所や美術館巡りを行うことができました。またフランス滞在の楽しみの1つであったサッカー観戦にも行くことができました。リヨンではここ7年連続フランスリーグチャンピオンであるオリンピック・リヨンの2試合、パリでは日本代表の松井大輔が当時所属していたル・マンとパリ・サンジェルマンの試合を見ることができました(写真9)。ヨーロッパでのサッカースタジアムの雰囲気をも十分に満喫することができました。

フランスへ出発する前には、冬はかなり寒いところだから十分に防寒対策していくよう諸先生方からアドバイスを頂いていましたが、幸運にもフランスでも暖冬だったようで体調を崩すことなく無事に充実した研修生活を送ることができました。最後に、このフランス研修の機会を与えていただいた京都府立医大の久保教授をはじめ大学スタッフ、日仏整形外科学会の小野村名誉教授、瀬本先生、大橋先生をはじめ役員の先生方に厚くお礼を申し上げます。

日仏交換研修帰朝報告

順天堂大学医学部附属順天堂浦安病院整形外科

金澤博明先生

はじめに

2008年4月から3ヶ月間, Lille, Lyon, Parisの各施設で研修を行いましたので報告させていただきます。

Clinique Medico-Chirurgicale-
Orthopaedic Department (Lille)

4月1日に渡仏しシャルルドゴール空港からTGVに乗り継ぎ一時間後リールに到着した時は既に日本出発後15時間経過していました。リール駅にDr. Jean-Alain Epinetteが自ら出迎えて下さいました。Audiの2シーターのため大きい旅行バッグがトランクに入りきらないハプニングあり、長旅で疲れているだろうから速くHotelに行こうと言われ、小さ目の荷物を後部トランクに入れ私は膝上で大きいバッグを抱えたままHigh-

wayを150kmで走ることになりました！BruayのHotel到着後Epinette先生と軽いDinnerを頂き、長旅後のリールのBeerはとても美味しかった記憶があります。

Dr. Epinetteは人工関節を御専門とされTKA, UKA, THA特にHA-Coating-Cementlessの長期成績を出されており、2007年度神戸で開催された日整会に来日され講演されています。私はBruayにあるCliniqueで約2週間お世話になりMis-TKA, Mis-UKA Mis-THAの手術に手洗いをして立ち会いました。創立約20年のClinique内はとても綺麗で整理されていました。手術室では先に看護師が手洗いし患部の消毒も済ませドレーピングまで行っていました。TKAに関してはFootスイッチで膝の角度を調整できる便利な下肢支持アーム台を使用し、関節切開後patellaは翻転せずスライドのみで展開し骨切りは丁寧に行っていました。またPatelloplastyのみで基本的に置換せずTrackingを



●写真1



●写真2

考慮されているようで、IKS分類でのPFの評価で Resurfacingとの比較において有意差ないとのことでした。

THAは肥満患者で大転子は触れないくらいobesityでよく触ってから皮切を置いていました。インプラントは一部HA-CoatingのStemで骨頭はAlmina-Ceramicを使用しMis-incisionでしたが展開は良く、後方関節包およびShort rotatorも再縫合しドレーンは使用していませんでした。またMis-UKA (HA-cementless) ではTibiaのコンポーネントが脛骨前方皮質には乗せていなかったため術後anterior subsidenceはないのですかと質問しましたが、内側皮質とeminentiaに差し込むkeel部分のHA-coatingで初期固定されるから大丈夫と話しておられました。

どの手術も非常にドレーピングおよび消毒、洗浄には気を配っていました。専属の男性看護師がいてこれが体格および手も大きく、筋鈎を3本片手で持てる大きさでかつ有能で時に手術の助手となり後は外回りだけでした。

またDr. EpinetteはOrthowaveというsystematicでclick一つで登録できる人工関節登録Systemの仕事がされており、専属のエンジニアが5人いて私はOrthowaveに関わる仕事をしているCRDAのOfficeを訪問しました(写真1)。ここで私は日本語Versionの作成の一部に関わることになりました。

またリール滞在中にDr. Epinetteの計らいでパリ14区に位置するL'Institute Mutualiste Montsourisで見学できるよう段取りして頂き、knee surgeonであるDr. GuingandのPrimary, Revision-TKAを2日間滞在中に見学しました(写真2)。特徴は①Primary, Revision共non tourniquetで行っていたこと、②balancer使用でgap balanceを術中測定、③patellaは全例置換、Primaryではcementless-HA coatingであることです。翌日はRevision-TKAでMobile-Rotating-Hingeを使用しセメント固定でInstrument挿入まで2時間くらいでした。最後の日はDr.Epinetteとリールの日本料理店で寿司を頂いたり、滞在中は私に何かと細かく気を配って下さりました。そしてリールフランドル駅前、ドゴール将軍広場はとても綺麗で建物も素晴らしく欧州ならではの醍醐味を感じました。

Hopital de la Croix- Rousse-Centre Livet (Lyon)

4月中旬、リールからリヨンへ約3時間の旅で移動しました。研修開始前日にLion大学のPhilippe Neyret教授に挨拶しに伺ったところ“Welcome to Lyon!”と歓迎してくれました。この施設はフランスにおけるKnee Surgeryのメッカとして代々Pr. TrillatやPr.Dejourといった御高名のDr.の出身地であります。Neyret教授以下いわゆるオーベン4人含め医局員は7人、その他Fellowなどで構成され、私以外にスペイン、トルコ、チュニジア、中国から来ていました。また滞在中の約2ヶ月間において各国から多くの整形外科医の訪問がありました。手術は朝8時から開始され、症例検討会は月曜夕方Neyret教授の総回診は月、木の夕方にあり、その際必ず衣服を脱がせ下肢alignmentなどをcheckしていました。水曜午前は教授外来に立ち会いましたがOfficeに患者さんが入って来られ、互いに向き合って問診後に部屋内の一室にある診察台で行っていました。私もNeyret教授の後に術後あるいは紹介の新患者を診察させていただき、また術後残存症状などについても教授は教えてくださいました。

手術は毎日あり、1日6-8件で8割が膝関節、他は股関節と肩関節で稀に外傷がありました。

非常に清潔範囲には気を配っており、手袋を頻回に交換を行うのが通常で看護師も整形外科専門であり仕事もできました。

この施設では手術1時間前くらいに手術待機室にて看護助手が患部をイソジン消毒した後、布に包まれて入室してきます。膝関節に関してはTKA、UKA、HTO、ACL再建、MPFL再建、半月切除、縫合、autologous chondrocyte implantation (Cartipatch) を中心に膝全般の手術に立ち会いました。人工膝関節はTorniner社のMobile-kneeでセメント使用でした。ACL再建では概ねBTBを使用し①術前Telosでの測定において患健差が大きいもの、②コンタクト競技sports、③Revision症例などでは薄筋を併用し関節外再建を追加していました。また術後回復度の評価として筋力測定などはしていないようでした。

4月中旬頃にHopital de Lyon主催のMaster Course

(フランス、イタリアの整形外科医から成る)がUniversite Claude Bernardであり金曜はNeyret教授の講演そして土曜はcadaverを使ったTKA、ACL seminarと症例検討会があり各国のFellowと参加しましたが貴重な経験となりました(写真3)。

その週末にはNeyret教授の御自宅に家族共々招待を受け、美味しい食事やワイン、コニャックを御馳走になりました。広大な芝生の庭を有しプールも備え付けであり家が高台なので、そこから世界遺産に指定されているLion概観が一望することができフランス上流家庭の一面を垣間見た気がし、日常ではなかなか味わえないFantasticな気分でした。

4月後半から5月初旬にかけESSKA & AOSSMのFellowship (Oxford, Pittsburgh, Stanford, CaliforniaからのFellow)の来仏がありCentre Livetでの手術見学がありました。彼らはTKAよりもMPFL再建や脛骨結節Osteotomy, ACL再建により関心がある様子でした。



●写真3(上)・写真4(下)

膝蓋骨脱臼Maquet術後PFOAに対するPatella Facetectomyおよび脛骨結節Lateralizationなどの手術が用意されていました。

5月中旬には同じLyon内にあるClinique Orthopedique du Parcを紹介していただきShoulder surgeonであるDr. Levigne, Dr. GarretのShoulder Surgeryを見学しました。すべての手術室に大きなモニターが設置され最新の設備が整った整形外科単科の病院でした。6時45分病院前で集合といわれ朝7時半から開始で、この施設には膝や脊椎、足、手の外科医もいました。Dr. Levigne(写真4)はMini Open cuff repair, Latarjet, Reverse ProtheseなどOpen法が主で、必ず麻酔下で再度診察を行い外来所見と確認していました。一方Dr. Garretは鏡視下手術が中心であり、両Drの手術に立ち会うことができexcitingでした。この施設では大抵手術が25-30件/日予定されていましたが、昼食は手術の合間にバケツを少しかじる程度で基本的に全ての手術が終了まで一気に行っていて、しかも手術体位や準備など全て自分でっておりprivate hospitalにおける医療の効率化への姿を感じ取られました。この病院訪問で特にDr. Garretとの出会いは今回の留学において印象に残る1ページの1つとなりました。

6月3日はNeyret教授と最後の夕食を共にさせて頂き、またいつか訪問したいと伝えると喜んでと言って下さいました(写真5)。大変紳士でありいつも気を配って下さり良いhospitalityで接していただきました。



●写真5

CLINIQUE JOUVENET (Paris)

6月第2週より約3週間Clinique Jouvénétで研修を行いました。パリ16区の閑静な住宅街にあるCliniqueで別名“Institut de la Main”とも言われていてOP35-40件/日のうち手の外科が半数、他は肩、膝、股関節の症例でした。この施設も各国からresident、visitorが来ており、私は主に肩関節UnitのDr. Dominique. F. Gazielly、その他3人のShoulder Surgeon (Dr. Valenti, Dr. Souziere) にお世話になりました。この施設は各Unitで色々やっており私は肩関節を中心に研修し、空いた時間で膝、股関節、手の外科の手術を見学しました。4人の肩Surgeonの手術はDr. Gazielly以外はBeach Chair Positionでした。鏡視下腱板修復、二頭筋長頭tenotomyおよびtenodesis、鏡視下Bankart、Calcium deposit tendinitisに対する鏡視下Excision, ArthroplastyおよびRevition, Arthrodesisなどに立会い、また水曜日はDr. Gaziellyの肩関節外来を拝見しました(写真6)。尚Arthroplastyに関しては約600症例をfollow upされているとのことでした。

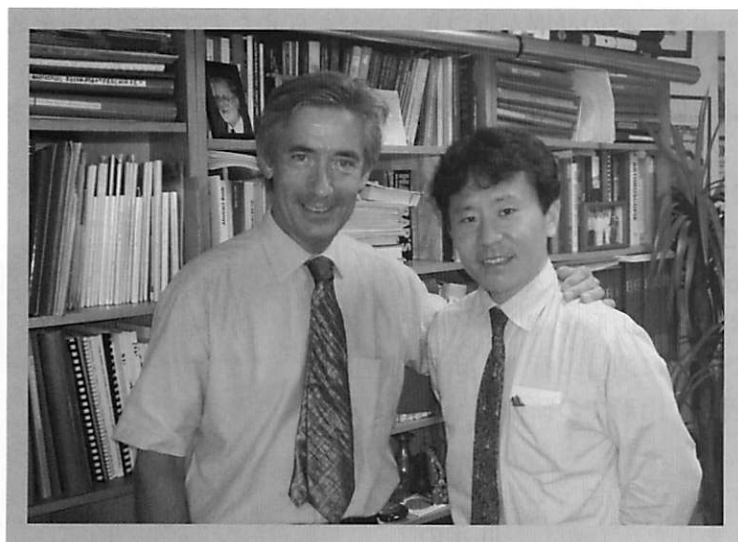
ここでは同じ肩Unitで行動を共にしたコロンビアのFellowのお蔭でJouvénétでの治療方針を早期に把握することができ、互いの医療情報交換も行え、パリで有

効な時間を過ごすことができました。フランスではISIS分類でコンタクトスポーツ、over head sports、競技レベル、20歳以下、骨性欠損、反復性のもはOpen Latarjetが第一選択だそうです。しかしNiceの施設では鏡視下でLatajetも行うようです。

またDr. Henri JudetのNavigation-TKAとJUDET牽引台を用いた前外側ApproachのMIS-THAに手洗いで立ち会いました。Navigation-TKAはPS Full mobile型を使用し、骨切り量や傾斜、ligament balanceそして prosthesisの回旋、内外反設置を即check可能でありました。またJUDET牽引台を用いたMIS-THAは大腿骨側の処置と整復の際、術者と外回りの看護師が息のあった呼吸で下肢を動かしながら行うもので二つ共興味深い手術であり勉強になりました。

総括

フランスの医療および文化を肌で感じることができ、また世界から日本という国および自分を振り返るいい時間を頂いた気がします。今回このような機会を与えていただいた日仏整形外科学会幹事の皆様、特に研修先に関して特別な配慮を下さいました小林晶先生および金子和夫教授にこの場を借りて御礼申し上げます。



●写真6

● 受け入れ
体験記

1

Apard先生の山形大学整形外科訪問

山形大学医学部整形外科教室
荻野利彦先生

University Hospital of Angersの若い先生から『私達の教室で行っている手の先天異常の仕事に興味があるので、山形に行きたい。経済的な面は日仏整形外科学会で支援してくれる予定である。』とのメールをもらったのは昨年1月です。通常ですと学会の方から交換研修医の訪問の可否を尋ねられていましたので、少しおかしいなとは思いました。しかし、Strasbourg大学の手の外科のPhilippe Liverneaux教授に日本訪問を勧められたこと、NancyのGilles Dautel教授の病院で研修をしたことが書かれていました。その後すぐにパリのChristophe Oberlin先生から彼を推薦するメールが来ました。そのまま時間が過ぎ、彼の訪問が近づきましたが、学会からは連絡がありません。8月になり事務局の瀬本啓喜先生に連絡を取り、彼が日仏整形外科学会の交換研修医であることが確認できました。様々な理由により山形大学整形外科での先天異常の手術例が減少しておりますので、2週間のみ訪問をお引き受けしました。昨年のFacca先生に続いて、3人目の交換研修医でした。8月24日に羽田から山形空港に着くというので、私と家内の2人で空港に迎えに行き、ホテルに案内して、翌日から2週間の山形での研修が始まりました。

手の先天異常を勉強したいという希望でしたので、典型的な例を用意しておきました。しかし、昨年のFacca先生の時と同様に発熱で最初の手術が中止になりました。約束通り、空いた時間は可能な限り手の先天異常についての個人的な講義を私がしました。時々、彼がフランスの症例をコンピューターで見せ

てくれて討論するという日が続きました。週末には高原准教授が野球見学に彼を仙台へ連れて行ったり、山形の名所の山寺見学に連れて行ったりして、勉強以外のことも楽しんだようです。教室の若い先生方も積極的に彼を誘って、食事に行ったり、討論したりしたようです。幸いに翌週の大学での分娩麻痺に対する手関節固定術と、外の病院で準備した合指症を伴った裂手症の症例は予定通り行うことができました。また、2週間のうち3日間は私の自宅に泊まり、家内の作った日本の家庭料理を楽しんでもらいました。3日間同じ屋根の下にいて、本当の日本の家庭を見てもらえたのではないかと考えています。9月6日に山形空港に家内と2人で送っていき、2週間の研修はあっという間に終わりました。いつかまた会える日を楽しみにしております。



●高原准教授と山寺にて

● 受け入れ
体験記

2

日本文化を楽しんでいただきました

大阪府立母子保健総合医療センター整形外科
川端 秀彦 先生

平成20年10月19日から31日までの2週間、Thomas APARD先生を大阪府立母子保健総合医療センターを中心とした大阪大学グループでお世話させていただきました。先生はパリからTGVで2時間西に向かったところのAngersでお勤めです。その地方には小児の手の専門家がないということで、母子センターでは手の先天異常の手術、外来を見学されました。大阪厚生年金病院では島田幸造先生の手関節鏡手術、米田稔先生の肩関節鏡手術を、行岡病院では正富隆先生の外傷外来を、大阪大学では村瀬剛先生のコンピューターを用いた最新の研究を見ていただきました。また、Osaka International Hand Meeting 2008では "The French Vision of Trapeziometacarpal Arthritis" のタイトルで発表もしていただきました。写真はその時のものです。先生の今後の臨床にお役に立つ研修であったのであれば幸いです。

先生は日本の文化、特にポップカルチャーに興味をお持ちで、それが今回の日仏整形外科学会の青年整形外科医交換研修制度に応募したきっかけにもなったそうです。大阪では大きなアニメのフィギュアを買って、うれしそうにしていました。どういう形であれ日本に興味を持ってもらえることはありがたいし、大切なことだと思います。もちろん、そういう先生ですから日本の食材もまったく問題なく、母子センターでは毎晩いっしょに食事をとっていました。

今後、フランスに帰られてからもAngersを中心とした地域で手の外科を中心に臨床を行っていくとのことでした。周辺に小児の手の専門施設がないので将来はこの領域の核施設を作りたいとの抱負を語られて大阪を離れて行かれました。今後のご活躍をお祈りしています。



クルピエ先生、日整会名誉会員に承認



かねてから本学会の元会長小野村敏信、元副会長小林晶、名誉会長七川歆次（いずれも日本整形外科学会名誉会員）の3名連名で、ジャン・ピエール クルピエ先生を日本整形外科学会のHonorary Memberに推薦していましたが、日本整形外科学会から平成20年7月16日開催の理事会において承認されたとの連絡がありました。平成21年5月の日本整形外科学会総会においてこのことの報告と名誉会員証の授与式が行われる予定です。

日整会では研修講演 [Surgical Treatment for Hemophilic Arthropathy in Adults] を話されます。

日本側・フランス側役員を紹介します

日本側役員

名誉会長	七川 歆次
会長	小林 晶
副会長	瀬本 喜啓
書記長	大橋 弘嗣
書記	弓削 至
	青木 清
	藤原 憲太
幹事	坂巻 豊教
	金子 和夫
	安永 裕司
名誉会員	小野村敏信
日本側公式連絡員	ジラン敬子

フランス側役員

Président	Jacques CATON (Lyon)
Vice Président et Secrétaire Général	Philippe MERLOZ (Grenoble)
Trésorier	Philippe WICART (Paris)
Membres du bureau	Philippe LIVERNEAUX (Rochefort)
	Jérôme COTTALORDA (Saint Etienne)
	Arain DURANDEAU (Bordeaux)
	Jean Pierre COURPIED (Paris)

あなたも フランス研修に!

日仏整形外科学会では、フランス整形外科学会（SOFCOT）との間で青年整形外科医の交換研修を行っております。来年度の研修条件、応募条件等は下記のとおりですのでお申し込みください。

本交換研修プログラムの趣旨は、フランスとのコネクションを持たない青年医師に留学先を紹介し、渡航費用と滞在費の一部を援助するというものです。したがって、一度フランス留学を経験しておられる先生は応募を御遠慮ください。

募 集 要 項

1) 募集人員	若干名（平成22年度）
2) 研修条件	<p>1. 滞在期間は3か月間を原則とする。 この間はヴィザが不要であるが、これを越して滞在中の延長に関するすべての手続き（語学学校入学手続きやヴィザ発給のための受け入れ承諾書の依頼等）は自分ですること。 1か月単位であれば複数の施設での研修も可能である。</p> <p>2. フランスでの滞在施設は、希望する研修分野等に応じてフランス側の担当委員が最も適当と思われる施設を推薦する。ただし応募者が特定施設を希望するときは申し出ることができる。 研修期間中の家族の同伴は原則として認められない。 (注意：本制度は大学の若手医師アンテルヌが病院に寝とまりしている部屋に泊まることを原則としている。滞在費用を自己負担する場合はこの限りではないが、家族への宿舍斡旋等に関して過去にさまざまなトラブルがあったため、学会として援助や斡旋は一切行わない。 特にパリにおいてはアパートの契約等に関するトラブルが多く、貴重な滞在期間の多くを宿舍探しに費やすこともあるので、フランスに知人等がいない場合は単身のほうが望ましい)</p> <p>3. 費用について a) 渡航費用の一部を日仏整形外科学会が援助する。 b) フランス滞在中の本人の宿泊費はフランス側が負担する。 ただし家族を同伴する場合は、宿泊費や食費等のすべての滞在費は自己負担とする。 c) 食費およびフランス国内での移動の費用は原則として応募者の負担とする。</p> <p>4. 帰国後、仏語（英語でも可）と日本語での報告書の提出ならびに本会の総会での帰朝報告を行う。</p> <p>5. 本年度の研修開始時期は4月以降とする。</p>
3) 応募条件	<p>1. 応募者は日仏整形外科学会会員であること。 2. 応募者は日本整形外科学会認定医であること。 3. 原則として40才を応募年齢の上限とする。 4. 勤務している病院または施設の責任者の承諾のあるもの。 5. フランス語または英語を話すもの。</p>
4) 応募に必要な書類	<p>1. 日仏整形外科学会交換研修申請書（ホームページからダウンロードしてください） 2. 履歴書（大学卒業以降とする） 3. 応募の動機や抱負について的小論文 4. 日仏整形外科学会会員2名の推薦状—推薦者は身元保証人に準ずる者と考えること。 5. 業績目録—主な発表論文5編以内（論文の別刷りは不要） 6. 渡仏承諾書 a) 大学の医局勤務者……………教授の承諾書 b) 病院または施設勤務者……………勤務している病院または施設の責任者の承諾書 (大学の医局人事により出張中の者は、教授の承諾書も要す。) 以上1. 以外の書式は自由であるが、すべてA4サイズに統一し、上記の順にならべて左上をホチキスで綴じること。また、<u>コピー10部</u>を同封すること。</p> <p>7. 連絡用住所シール（5枚）……………希望する連絡場所を記入して上記の書類とともに返送すること。 連絡用住所シール（5枚）あて先は～～～先生としてください。</p>
5) 選考方法	<p>1. 第1次審査は書類選考とする。書類審査の結果は平成21年7月上旬に個別に連絡する。 2. 書類選考に合格したものには平成21年8月上旬に大阪府済生会中津病院において面接を行う予定である。 面接の時間は個別に通知する。 3. 合否は平成21年8月中旬に通知する。 4. 合格者は後日改めて仏文または英文の履歴書等、フランスでの研修に必要な書類が求められる。</p>
6) 申請締め切り	平成21年6月30日必着
7) 申し込み先	日仏整形外科学会事務局 大阪府済生会中津病院整形外科内 〒530-0012 大阪市北区芝田2-10-39 大阪府済生会中津病院整形外科 Tel(06)6372-0333 Fax(06)6372-0339

日仏整形外科学会 係 大橋 弘嗣

フランス人研修医 受け入れのお願い

本年度も日仏整形外科学会とフランス整形外科学会（SOFOT）との間で、青年整形外科医の交換研修を実施いたします。

受け入れ期間は原則として3ヶ月間ですが、1ヶ月でも2ヶ月でも結構ですので、是非会員の先生方のおられる施設で、フランス人整形外科医の研修を受け入れて頂きたくお願い申し上げます。

来日するフランス人医師は、英語を話す事が条件になっております。また日仏間の旅費はSOFOTが支給し、日本での滞在費（宿泊費・旅費）は、日本側（原則として受け入れ施設が）負担することになっております。受け入れを承諾していただける場合は、受け入れ承諾書に滞在条件等をご記入いただき、係までご送付ください。

日仏整形外科学会 会長 小林 晶
日仏整形外科学会 交換研修係 小林 晶
連絡先：大阪府済生会中津病院整形外科

〒530-0012 大阪市北区芝田2-10-39
TEL 06-6372-0333（お問い合わせは大橋弘嗣まで）
LU7H-OOHS@asahi-net.or.jp



フランス整形外科医交換研修受け入れ承諾書

様式 1

(日仏整形外科学会 交換研修プログラムによる)

フランス青年整形外科医を対象とした、交換研修プログラムの日本側受け入れを以下の条件のもとで承諾します。(すでに登録されている施設は、変更事項のある場合のみお送りください。)

受け入れ責任者 _____

受け入れ施設名 _____

住 所 _____

電話番号 (_____) _____

専門分野 _____

受け入れ条件 (該当する項目の□内にチェックして下さい)

*受け入れ可能な期間 (原則としては3カ月間です)

3カ月間 2カ月間 1カ月間 何カ月でもよい その他 (_____)

*受け入れ可能な時期

月から 月まで 月を除く 常時受け入れる
 その他 (具体的に _____)

*受け入れ可能な人数

年間1人 年間2人 年間3人以上 その他 (_____)
 同一時期に1人 同一時期に2人以内 同一時期に3人以上
 その他 (_____)

*宿泊設備について

宿泊設備を無料で利用可能
 宿泊設備を有料で利用可能 (1日 _____ 円)
 宿泊設備は備えていないがホテル等の宿泊費は支給する
 宿泊設備は備えていない。ホテル等の宿泊費も支給しない
 その他 (_____)

*食事について

施設内で食事を用意する
 施設内で食事の準備はしないが食費を支給する
 一部施設内で食事を用意し、一部食費を支給する
 その他 (_____)

*交通費について

交通費を支給する
 交通費は支給しない
 その他 (_____)

*その他

日本国内の学会等への参加を援助する
 その他 (_____)

以上の条件のもとに日仏整形外科学会の青年整形外科医の日仏交換プログラムの日本側受け入れ機関となることを承諾します。

平成 年 月 日

受入責任者 氏名

印

第10回日仏整形外科合同会議

(10ème Réunion de l'AFJO)

開催のご案内

第10回日仏整形外科合同会議 (AFJO) を下記の日程で開催いたします。フランス側からの強い要望があり開催地を沖縄にいたしました。プールサイドでのウェルカムカクテル、琉球村・東南植物園への学会ツアー、玉泉洞や美ら海水族館へのオプションツアー、ゴルフなど学会に加えて沖縄もエンジョイしていただけるよう準備いたしております。

初夏を感じる頃の沖縄で多くの先生方の参加をお待ちしています。

記

【会 期】 2009年5月28日(木)～30日(土)

【会 場】 沖縄コンベンションセンター (宜野湾市)

宜野湾市真志喜4-3-1 / TEL 098-898-3000

【特別講演】 Ceramic - ceramic couple: A 38 years experience

Prof. Laurent Sedel (Hôpital Lariboisière, Paris)

Sports injury of the upper extremity

琉球大学整形外科教授 金谷文則 先生

Prof. Fuminori Kanaya (University of the Ryukyus, Okinawa)

【主 題】 整形外科における新しい技術

他一般演題

【応募期間】 2009年2月28日(土)まで延長しました。

【応募方法】 詳細はホームページ (<http://www.sofjo.gr.jp/>) 参照

【事務局】 〒530-0012 大阪市北区芝田2-10-39

大阪府済生会中津病院整形外科

TEL 06-6372-0333 FAX 06-6372-0339

e-mail : LU7H-OOHS@asahi-net.or.jp

第14回日仏整形外科学会

(14ème Réunion de Société Franco-Japonaise d'Orthopédie)

開催のご案内

2010年(平成22年)に第14回日仏整形外科学会(Société Franco-Japonaise d'Orthopédie; SOFJO)を担当させていただくこととなりました。第1回の学会は七川歆次先生により1987年に神戸で開催され、2008年に金子和夫先生による第13回学会が開催されましたが、回を追うごとに参加者も増加しております。フランスの文化やフランス人のespritに触れることができるのも本学会の特徴であります。このようにユニークで伝統ある本学会を広島にて開催させていただくことを大変光栄に存じます。

SOFJOと私の関わりは1995年度の交換研修から始まり、リヨンのCaton先生、Cartillier先生ならびにパリのCourpied先生、Kerboull先生に指導を受け、THAに対する考え方や手術手技において有益な知識を得ることができました。Non-touching techniqueやKerboull plateとallograftによる再建法は、現在も日常的に使用しており、フランスで学んだ知見は私の股関節外科に対する姿勢に大きく影響しています。

また、広島大学には生田義和名誉教授ならびに現在の越智光夫教授のもとにフランスからの交換研修の先生が多数滞在されており、SOFJOとは縁の深い地であります。

越智教授にもご支援をいただけることとなっております。フランスからの講師をお招きしでの特別講演ならびに一般口演などを予定し、有意義な学会となりますように努力させていただきます。

多数の先生の発表と参加を心よりお待ちしております。

広島大学大学院人工関節・生体材料学講座 安永裕司

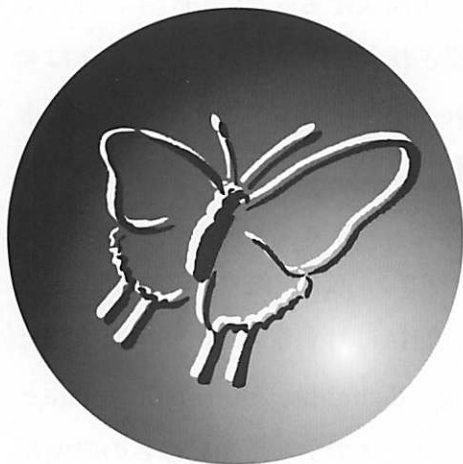
記

【会 期】平成22年9月中旬

【会 場】広仁会館(広島大学霞キャンパス内) 広島市南区霞1-2-3

【特別講演】Courpied JP MD, Caton J MD(予定)

1



日仏整形外科学会ボランティアグループ 「パピヨン」 に入会しませんか

———Equipe bénévole pour la SOFJO (AFJO)———

日仏整形外科学会の活動を支えていただくために1996年4月に結成されました。

まず1996年4月13日・14日に東京で開催された第4回日仏整形外科合同会議のお手伝いをするために10数名の先生や関係の方々に登録していただき、会議の開催に協力していただきました。

今後も日仏整形外科学会の運営をお手伝いしていただける先生ならびに一般の方々にボランティアとしてご登録いただき、可能な時間にお手伝いをお願いしたいと思っております。

日仏整形外科学会の会員または会員1名の推薦を受けた方なら誰でも入会できます。

日常的な簡単な英会話ができれば、フランス語は必ずしも必要ではありません。もちろんフランス語のできる方は大歓迎です。シンボルマークは蝶のマークです。

Papillonに関するお問い合わせ、入会申込は日仏整形外科学会事務局、大橋弘嗣まで。

2



Welcome to So.F.J.O Homepage
ようこそ日仏整形外科学会 (SOFJO) のホームページへ

日仏整形外科学会のインターネットホームページのアドレスは

<http://www.sofjo.gr.jp/>

です。

是非のぞいてみてください。

- ・沿革
- ・活動内容
 - 入会のご案内
- ・役員紹介
- ・共同研究
- ・交換研修
- ・日仏整形外科協議会 (AFJO)
- ・日仏整形外科学会ボランティアグループ
- ・関連リンク集
- ・SOFJO の Top Page へ

平成19年度会計報告

歳入の部	(単位：円)
一般会員年会費 (¥3,000×170人)	510,000
一般会員年会費 (¥5,000×67人)	335,000
賛助金	830,000
広告料	980,000
預金利息	888
前年度繰越金	1,748,534
計	4,404,422

平成20年度事業費予算編成

歳入の部	(単位：円)
一般会員年会費	1,200,000
賛助金	1,500,000
広告料	800,000
預金利息	800
前年度繰越金	1,488,115
計	4,988,915

歳出の部 (単位：円)

日本人交換整形外科医奨学金 (6名)	1,200,000
フランス人交換整形外科医奨学金 (0名)	0
SOFJO/AFJO開催関係費	0
日仏整形外科学会関連事業 (表彰など)	0
日仏共同研究、研究助成金	0
森崎仏日整形外科学用語集編纂事業	0
インターネットホームページ維持管理費	306,300
コンピューター関連費	0
日仏整形外科学会事務局費	
通信費	118,520
事務費	2,862
アルバイト代	128,880
会議費	40,320
旅費・交通費	324,470
連絡員費用 (ジランさん)	100,000
印刷費	689,375
雑費	5,580
出金小計	2,916,307
次年度繰越金	1,488,115
計	4,404,422

歳出の部 (単位：円)

日本人交換整形外科医奨学金	
渡航費+滞在費 (一部) 200,000×3名	600,000
フランス人交換整形外科医奨学金	
滞在費 (2ヶ月) +交通費 100,000×2名	200,000
SOFJO/AFJO開催関係費	1,000,000
日仏整形外科学会関連事業 (表彰など)	50,000
日仏共同研究、研究助成	200,000
森崎仏日整形外科学用語集編纂事業	50,000
インターネットホームページ維持管理費	400,000
コンピューター関連費	50,000
事務局 (通信費、事務費、アルバイト代)	
通信費	150,000
事務費	50,000
アルバイト代	260,000
会議費	50,000
旅費・交通費	500,000
連絡員費用 (ジランさん)	100,000
印刷費	800,000
予備費	50,000
出金小計	4,510,000
次年度繰越金	478,915
計	4,988,915

4

これまでに 交換研修に参加された 先生方

研修年度	氏名	所属医局
1990	稲毛 昭彦	大阪医科大学
1991	三輪 隆	帝京大学
1991	末松 典明	旭川医科大学
1992	星 忠行	弘前大学
1992	村上 元庸	滋賀医科大学
1992	久保 俊一	京都府立医科大学
1993	小浦 宏	岡山大学
1994	西川 真史	弘前大学
1994	岩崎 幹季	大阪大学
1995	石澤 命仁	滋賀医科大学
1995	安永 裕司	広島大学
1996	安間 基雄	順天堂大学
1996	寺門 淳	千葉大学
1996	仁平高太郎	慶応義塾大学
1997	益田 和明	岐阜大学
1997	金子 和生	山口大学
1998	山川 徹	三重大学
1998	岡本 雅雄	大阪医科大学
1999	清重 佳郎	山形医科大学
1999	川崎 拓	滋賀医科大学
2000	宮本 敬	岐阜大学
2000	藤井 一晃	弘前大学
2000	細野 昇	大阪大学
2001	鳥飼 英久	千葉大学
2001	久我 尚之	九州大学
2002	瀧川 直秀	大阪医科大学
2002	松峯 昭彦	三重大学
2003	柘原 俊久	昭和大学藤が丘病院
2003	矢吹 有里	慶応義塾大学
2004	和田 孝彦	関西医科大学
2004	久留 隆史	広島大学
2004	小山内俊久	山形大学
2005	小田 幸作	高槻赤十字病院
2005	松尾 篤	九州大学
2006	小室 元	阪和住吉総合病院
2006	城戸 顕	奈良県立医科大学
2006	早稲田明生	国際親善総合病院
2007	益田 宗彰	総合せき損センター
2007	黒住 健人	高知医療センター
2007	菊池 克久	滋賀医科大学整形外科
2008	水野 直子	行岡病院
2008	金澤 博明	順天堂浦安病院
2008	渡辺 千聡	大阪医科大学

5

これまでにフランスから 交換研修医として来られた 先生方と研修施設

研修年度	氏名	研修病院名
1991	Philippe LEVEREAUX	京都府立医科大学・広島大学
1991	Luis Michel COLLET	大阪医科大学・滋賀小児センター・福岡こども病院
1992	Frederic DUBRANA	福岡整形外科病院・九州大学
1992	Marc CHASSARD	慶応義塾大学・東海大学・札幌医科大学
1994	Philippe WICART	山口大学・金沢大学
1994	Philippe RENAUX	滋賀医科大学・岡山大学
1995	Michel NINOU	大阪医科大学・新潟手の外科研究所・広島大学
1997	Bernardo Vargas BARRETO	国立小児病院・岡山大学・国立大阪病院
1997	Sylvie MERCIER	大阪医科大学
1998	Jérôme COTTALORDA	大阪医科大学・福岡県立粕屋新光園
1999	Olivier CHARROIS	滋賀医科大学・京都市立病院
1999	Eric HAVET	滋賀医科大学
2001	Laurent JACQUOT	福岡整形外科病院・慶応義塾大学・高岡整志会病院
2001	Alexandre ROCHWERGER	大阪医科大学・山形大学
2004	Brice ILHARRBORDE	総合せき損センター・大阪市立大学
2007	Damien Breitel	総合せき損センター・奈良県立医科大学
2007	Sybille Facca	弘前大学・山形大学・京都府立医科大学・広島大学
2008	Thomas Apard	山形大学・大阪府立母子保険総合医療センター

6

役員の公募

日仏整形外科学会では、本学会の運営に携わっていただける先生を公募しています。

将来にわたって本学会の発展に協力していただける先生は自薦、他薦を問わず事務局・大橋弘嗣までご連絡ください。

7

賛助金を頂戴いたしました。
ご協力ありがとうございました。

サントリー株式会社
メドトロニックソファモアダネック株式会社
旭化成ファーマ株式会社
サノフィ・アベンティス株式会社
バイオメットジャパン株式会社
ビー・ブラウンエースクラブ株式会社
参天製薬株式会社
グラクソスミスクライン株式会社

(順不同)

編集 後記

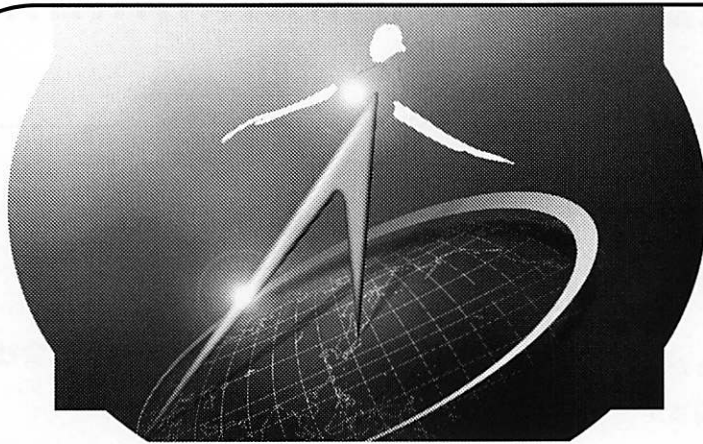
2008年9月に東京で第13回日仏整形外科学会が行われました。今回はフランスから3名の先生が来日されて講演をさせていただいたり、日本からの発表にコメントをさせていただいたりして、ますます日仏の交流の会になってきたように思いました。写真も掲載いたしましたので、思い出になればと思います。

今回は多くの先生から交換研修報告記をいただきました。同じ施設に行かれた先生もおられますが、それぞれに経験をされてきたようで、読み返しますとますますおもしろく感じました。また、フランスから1名の先生が交換研修に来られましたので、受け入れてくださった先生から体験記をいただきました。

小林晶先生が会長に就任され、役員にも少し変更がございました。これからもますます日仏整形外科学会が発展していけるよう新体制でがんばって参りますので、会員の先生方からも暖かいご協力をお願いいたします。

第10回日仏整形外科合同会議は2009年5月28日～30日に沖縄で開催されます。演題応募、学会登録を行っております。フランスからも多くの先生が来られることを期待していますので、日本からも多くの先生方に来ていただけますようお待ちしております。

(係 大橋弘嗣)



AA
ARTZ[®]
ARTZ Dispo[®]

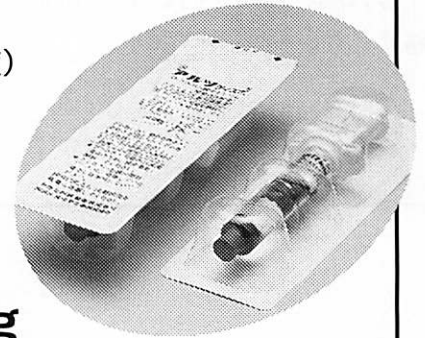
関節機能改善剤 (ヒアルロン酸ナトリウム関節内注射液)

指定医薬品 処方せん医薬品 注意—医師等の処方せんにより使用すること

アルツ[®] 関節注25mg

指定医薬品 処方せん医薬品 注意—医師等の処方せんにより使用すること

アルツディスポ[®] 関節注25mg



ブリストア包装内滅菌済

特許登録—日本国特許第3831505号；第3845110号(医療用滅菌包装における滅菌方法)

(製造販売元) 生化学工業株式会社
 東京都千代田区丸の内1丁目6-1



ADOFEED[®]

経皮吸収型鎮痛消炎貼付剤

指定医薬品

アドフィード[®]
パップ40mg/80mg

(フルルビプロフェン製剤)

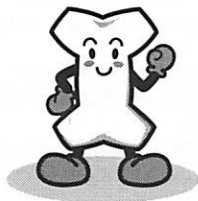
(製造販売元) リードケミカル株式会社
 富山県富山市日俣77-3

- 各製品の効能・効果、用法・用量、禁忌、使用上の注意等の詳細は、製品添付文書をご参照ください。
- 各製品共、薬価基準収載

科 研 製 薬 株 式 有 限 公 司

[発売元・資料請求先] 〒113-8650 東京都文京区本駒込2丁目28-8

07L4
 (2008年9月作成)



骨粗鬆症治療剤

薬価基準収載

ボナロン[®]錠 35mg

Bonalon[®] Tablet 35mg <アレンドロン酸ナトリウム水和物錠>
劇薬・指定医薬品・処方せん医薬品 (注意—医師等の処方せんにより使用すること)

※効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。

製造販売元

TEIJIN 帝人ファーマ株式会社

資料請求先：学術情報部
〒100-8585 東京都千代田区霞が関3丁目2番1号

商標 #ボナロン/Bonalon[®] is the registered trademark of Merck & Co., Inc., Whitehouse Station, NJ, USA.

2008年6月作成
BNW094 (KK) 0806



広い患部に
大判サイズ

- 広い患部に適する大判サイズ(14cm×20cm)
- 優れた使用性
 - ◆大判サイズで初の貼りやすいセンターカットフィルム採用
 - ◆優れた伸縮性・粘着性を有し、屈曲伸展部にもピッタリ貼付できる製剤である。
- 大判サイズで初の「清涼感があり、臭いが少ない」製剤
- 副作用 総症例6,908例中副作用が報告されたのは141例(2.04%)で、すべて接触皮膚炎であった。その症状は、発疹32件、発赤36件、掻痒感29件、刺激感9件等であった。(モーラス再審査終了時)
ほかに医師などの自発的報告により、アナフィラキシー様症状、喘息発作の誘発(アスピリン喘息)、光線過敏症の発現が報告されている。

指定医薬品
経皮鎮痛消炎剤 ケトプロフェン0.3% (薬価基準収載)

モーラス®パップ 60mg

- 【禁忌】**(次の患者には使用しないこと)
- (1)本剤又は本剤の成分に対して過敏症の既往歴のある患者
(「重要な基本的注意」の項(1)参照)
 - (2)アスピリン喘息(非ステロイド性消炎鎮痛剤等による喘息発作の誘発)又はその既往歴のある患者[喘息発作を誘発するおそれがある。]
 - (3)チアプロフェン酸、スプロフェン、フェノフィブラート及びオキシベンゾンに対して過敏症の既往歴のある患者[ケトプロフェンと交叉感作性を有することが知られており、本剤の使用によって過敏症を誘発するおそれがある。]

【効能・効果】
下記疾患並びに症状の鎮痛・消炎
変形性関節症、肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、腱周囲炎、上腕骨上顆炎(テニス肘等)、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛

【効能・効果に関連する使用上の注意】
本剤の使用により重篤な接触皮膚炎、光線過敏症が発現することがあり、中には重度の全身性発疹に進展する例が報告されているので、疾病の治療上の必要性を十分に検討の上、治療上の有益性が危険性を上回る場合のみ使用すること。

- 【用法・用量】**
1日2回患部に貼付する。
- 【使用上の注意】**
- 1.慎重投与(次の患者には慎重に使用すること)
気管支喘息のある患者[アスピリン喘息患者が潜在しているおそれがある。]
 - 2.重要な基本的注意
 - (1)本剤又は本剤の成分により過敏症(紅斑、発疹・発赤、腫脹、刺激感、掻痒等を含む)を発現したことがある患者には使用しないこと。
 - (2)接触皮膚炎又は光線過敏症を発現することがあり、中には重度の全身性発疹に至った症例も報告されているので、使用前に患者に対し次の指導を十分に行うこと。
 - 1)紫外線曝露の有無にかかわらず、接触皮膚炎を発現することがあるので、発疹・発赤、掻痒感、刺激感等の皮膚症状が認められた場合には、直ちに使用を中止し、患部を遮光し、受診すること。なお、使用後数日を経過して発現する場合があるので、同様に注意すること。
 - 2)光線過敏症を発現することがあるので、使用中は天候にかかわらず、戸外の活動を避けるとともに、日常の外出時も、本剤貼付部を衣服、サポーター等で遮光すること。なお、白い生地や薄手の服は紫外線を透過するおそれがあるので、紫外線を透過させにくい色物の衣服などを着用すること。また、使用後数日から数カ月を経過して発現することもあるので、使用後も当分の間、同様に注意すること。
 - (3)消炎鎮痛剤による治療は原因療法ではなく、対症療法であることに留意すること。
 - (4)皮膚の感染症を不顕性化するおそれがあるので、感染を伴う炎症に対して用いる場合には適切な抗菌剤又は抗真菌剤を併用し、観察を十分に慎重に投与すること。
 - (5)慢性疾患(変形性関節症等)に対し本剤を用いる場合には薬物療法以外の療法も考慮すること。また、患者の状態を十分に観察し、副作用の発現に留意すること。

●その他の使用上の注意については添付文書をご参照下さい。2008年11月作成

製造販売元 **久光製薬株式会社** 〒841-0017 鳥栖市田代大宮町408
資料請求先: 学術部 〒100-6221 東京都千代田区丸の内1-11-1



*We contribute to
Human Health*

日本メディカルマテリアル株式会社 大阪市淀川区宮原3丁目3-31 (上村ニッセイビル9F) 〒532-0003 <http://www.jmmc.jp/>
Tel:06-6350-1036 Fax:06-6350-5736

東京支社 東京都新宿区西新宿2丁目4-1 (新宿NSビル10F) 〒163-0810 Tel:03-5339-3645 Fax:03-3343-3097

札幌営業所 札幌市中央区北一条西3丁目3 (札幌MNビル9F) 〒060-0001
Tel:011-280-6020 Fax:011-281-6525

東北営業所 仙台市青葉区大町2丁目2-10 (住友生命仙台青葉通ビル6F) 〒980-0804
Tel:022-216-5176 Fax:022-216-7116

大宮営業所 さいたま市大宮区桜木町2丁目287 (大宮西口栄ビル4F) 〒330-0854
Tel:048-640-7779 Fax:048-641-5828

名古屋営業所 名古屋市東区葵3丁目15-31 (住友生命千種ニュータワービル9F) 〒461-0004
Tel:052-930-1481 Fax:052-938-1377

京都営業所 京都市下京区西洞院通塩小路上ル東塩小路608-9
(日本生命京都三哲ビル3F) 〒600-8216
Tel:075-353-4322 Fax:075-343-3118

大阪営業所 大阪市淀川区宮原3丁目3-31 (上村ニッセイビル8F) 〒532-0003
Tel:06-6350-1017 Fax:06-6350-8157

神戸営業所 神戸市中央区小野柄通7丁目1-1
(日本生命三宮駅前ビル8F) 〒651-0088
Tel:078-230-2531 Fax:078-230-2536

岡山営業所 岡山市磨屋町10-16 (ニッセイ同和損保岡山ビル4F) 〒700-0826
Tel:086-803-3620 Fax:086-225-2289

広島営業所 広島市中区鞆町13-11 (明治安田生命広島鞆町ビル9F) 〒730-0016
Tel:082-212-1003 Fax:082-211-3008

九州営業所 福岡市博多区博多駅東2丁目10-35 (J博多ビル7F) 〒812-0013
Tel:092-452-8140 Fax:092-452-8177



CELECOX

非ステロイド性消炎・鎮痛剤 (COX-2選択的阻害剤) 薬価基準収載

セレコックス錠 100mg
200mg

セレコキシブ錠 劇薬、指定医薬品、処方せん医薬品(注意-医師等の処方せんにより使用すること)

- 「効能・効果」「用法・用量」「警告、禁忌を含む使用上の注意」等につきましては、製品添付文書をご参照ください。

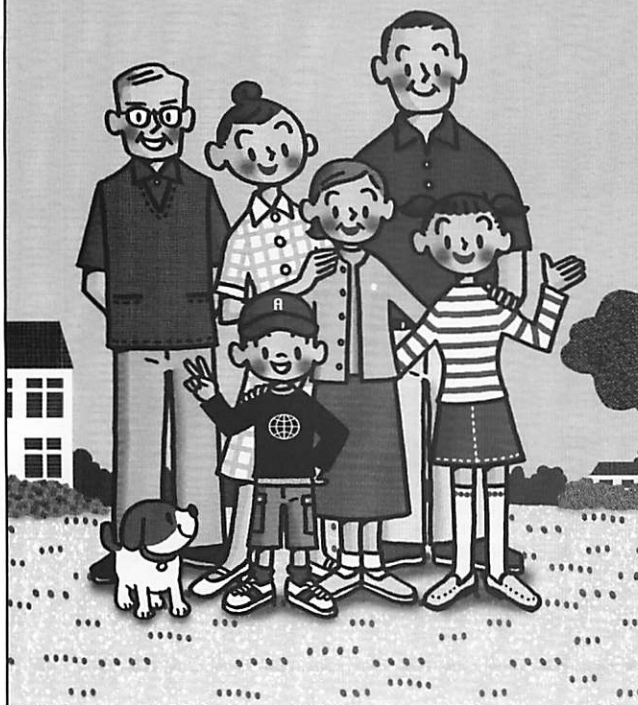
製造販売 **アステラス製薬株式会社**
東京都板橋区蓮根3-17-1
【資料請求先】本社/東京都中央区日本橋本町2-3-11

販売提携 **ファイザー株式会社**
〒151-8589 東京都渋谷区代々木3-22-7
資料請求先：製品情報センター

08/4作成 A412 A.03

CELECOX

エーザイの骨粗鬆症関連製品



骨粗鬆症治療剤/骨ページェット病治療剤

アクトネル錠 17.5mg

リセドロン酸ナトリウム水和物錠 ●薬価基準収載

劇薬 指定医薬品 処方せん医薬品(注意-医師等の処方せんにより使用すること)

骨粗鬆症治療用ビタミンK₂剤

グラケーカプセル 15mg

メナテレン製剤 ●薬価基準収載

低カルボキシ化オステオカルシンキット 検体検査実施料収載
血清中低カルボキシ化オステオカルシン(ucOC)測定用医薬品

ピコルミン ucOC

電気化学発光免疫測定法

※販売提携品

- 効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については添付文書をご参照ください。



エーザイ株式会社
〒112-8088 東京都文京区小石川4-6-10
<http://www.eisai.co.jp>

商品情報お問い合わせ先：エーザイ株式会社 お客様ホットライン室
☎0120-419-497 9~18時(土、日、祝日 9~17時)

ACL0807-10 2008年7月作成

20th ANNIVERSARY

オキサセフェム系抗生物質製剤

指定医薬品, 処方せん医薬品^{注1)}

フルマリン[®]
静注用0.5g・1g, キット静注用1g

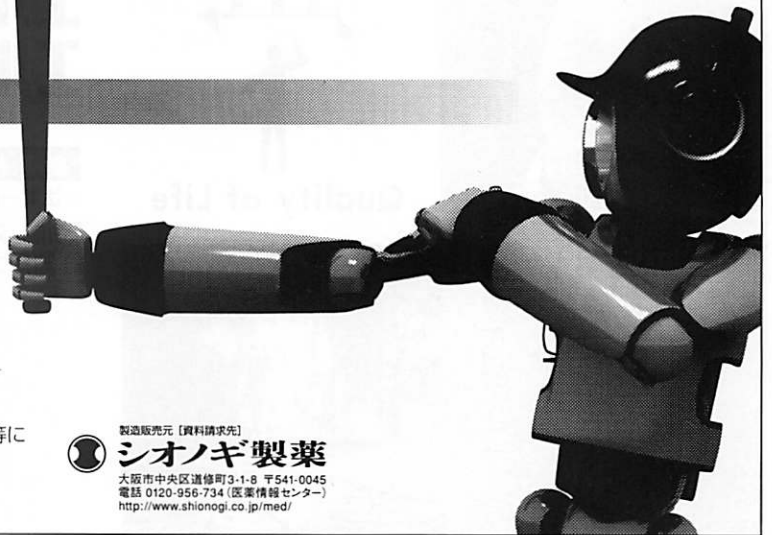
日本薬局方 注射用フロモキシセフナトリウム **Flumarin**[®] 略号 FMOX

注1) 注意一医師等の処方せんにより使用すること

■ 薬価基準収載

■ 「効能・効果」, 「用法・用量」, 「禁忌」, 「原則禁忌」, 「使用上の注意」等については添付文書等をご参照下さい。

2008年3月作成 A42 ㊄:登録商標



製造販売元【資料請求先】

シオノギ製薬

大阪市中央区道徳町3-1-8 〒541-0045

電話 0120-956-734 (医薬情報センター)

<http://www.shionogi.co.jp/med/>

THE **Voltaren**[®]



ボルタレン[®]テープ

 **NOVARTIS**

経皮鎮痛消炎剤

薬価基準収載

ボルタレン[®]テープ15mg
テープ30mg
指定医薬品
Voltaren[®] Tape ジクロフェナクナトリウムテープ

販売

(資料請求先)

ノバルティス ファーマ株式会社

〒106-8618 東京都港区西麻布4-17-30

製造販売: 同仁医薬化工株式会社

NOVARTIS DIRECT

☎0120-003-293

受付時間: 月~金 9:00~18:00

www.voltaren.jp

● 禁忌、効能・効果、用法・用量、使用上の注意については、製品添付文書をご覧ください。

製造販売元 **リートニカル株式会社**
〒930-0912 富山県富山市日保7-3

販売元 (資料請求先) **第一三共株式会社**
東京都中央区日本橋本町3-5-1
Daiichi-Sankyo

●効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等
については製品添付文書をご参照ください。

経皮吸収型鎮痛・抗炎症剤 **ロキソニン®**
100mg
指定医薬品 ロキソロフェンナトリウム水和物貼付剤



0704 (0810)



骨粗鬆症治療剤 薬価基準収載
エルクトン®注20S
Elictonin[®] Inj. 20S Elictonin[®] Inj. 20S Dispo
劇薬、指定医薬品、処方せん医薬品※ (エルクトン®注射液)
※注意一医師等の処方せんにより使用すること。
「効能・効果」「用法・用量」「禁忌を含む使用上の注意」等、
詳細については製品添付文書をご参照下さい。

製造販売元 (資料請求先) **旭化成コープ株式会社**
医薬学術統括部：東京都千代田区神田美土代町9番地1
URL <http://www.asahi-kasei.co.jp/iyaku/>

旭化成コープ

H18.02

薬価基準収載



しっかり守って、きれいに治す。

胃炎・胃潰瘍治療剤

指定医薬品

ムコスタ 錠100 顆粒20%
Mucosta® レバミピド製剤

製造販売元
大塚製薬株式会社
Otsuka 東京都千代田区神田司町2-9

資料請求先
大塚製薬株式会社
信頼性保証本部 医薬情報センター
〒108-8242 東京都港区港南2-16-4
品川グランドセントラルタワー 13F

〔禁忌(次の患者には投与しないこと)〕
本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

〔効能・効果〕及び〔用法・用量〕

〔効能・効果〕	〔用法・用量〕
胃潰瘍	通常、成人には1回レバミピドとして100mg(ムコスタ錠100:1錠、ムコスタ顆粒20%:0.5g)を1日3回、朝、夕及び就寝前に経口投与する。
下記疾患の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、浮腫)の改善 急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期	通常、成人には1回レバミピドとして100mg(ムコスタ錠100:1錠、ムコスタ顆粒20%:0.5g)を1日3回経口投与する。

〔使用上の注意〕—抜粋—

副作用

調査症例10,047例中54例(0.54%)に臨床検査値の異常を含む副作用が認められている。このうち65歳以上の高齢者3,035例では18例(0.59%)に副作用がみられた。副作用発現率、副作用の種類においても高齢者と非高齢者で差は認められなかった。(ムコスタ錠100の承認時及び再審査終了時)

以下の副作用には別途市販後に報告された自発報告を含む。

重大な副作用

1. ショック、アナフィラキシー様症状(頻度不明*)：ショック、アナフィラキシー様症状があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
2. 白血球減少(0.1%未満)、血小板減少(頻度不明*)：白血球減少、血小板減少があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
3. 肝機能障害(0.1%未満)、黄疸(頻度不明*)：AST(GOT)、ALT(GPT)、 γ -GTP、Al-Pの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

*：自発報告において認められた副作用のため頻度不明。

◇その他の使用上の注意等は、製品添付文書をご参照ください。

(‘07.10作成)

経口プロスタグランジンE₁誘導体制剤

指定医薬品
処方せん医薬品^①

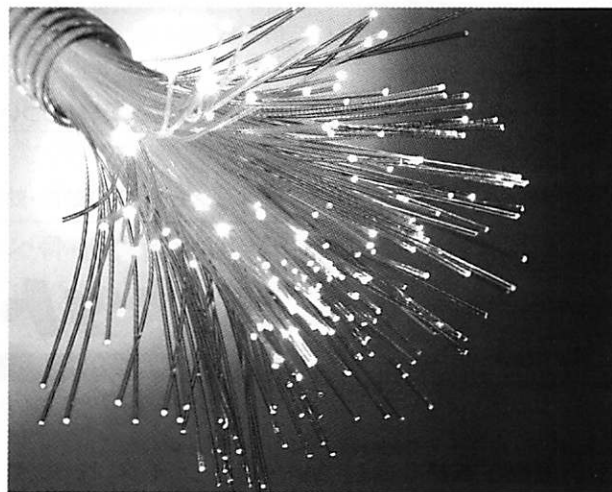
オパールモン 錠5 μ g

リマプロスト アルファデクス錠

OPALMON

注) 注意—医師等の処方せんにより使用すること。

薬価基準収載



●効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等、
詳細は製品添付文書をご参照ください。



資料請求先

小野薬品工業株式会社

〒541-8564 大阪市中央区久太郎町1丁目8番2号

050601

健康な
骨だから、
できること。

17.5km
地点



2008年7月1日より、
投薬期間制限がなくなりました。

禁忌(次の患者には投与しないこと)

- (1) 食道狭窄又はアカラシア(食道弛緩不能症)等の食道通過を遅延させる障害のある患者
- (2) 本剤の成分あるいは他のビスフォスフォネート系薬剤に対し過敏症の既往歴のある患者
- (3) 低カルシウム血症の患者
- (4) 服用時に立位あるいは坐位を30分以上保てない患者
- (5) 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人
- (6) 高度な腎障害のある患者

■効能・効果

骨粗鬆症、骨ペーজেット病

〈効能・効果に関連する使用上の注意〉

骨粗鬆症の場合

1) 本剤の適用にあたっては、日本骨代謝学会の原発性骨粗鬆症の診断基準等を参考に骨粗鬆症と確定診断された患者を対象とすること。

2) 男性患者での安全性及び有効性は確立していない。

骨ペーজেット病の場合

本剤の適用にあたっては、日本骨粗鬆症学会の骨Paget病の診断と治療ガイドライン等を参考に骨ペーজেット病と確定診断された患者を対象とすること。

■用法・用量

骨粗鬆症の場合

通常、成人にはリセドロン酸ナトリウムとして17.5mgを1週間に1回、起床時に十分量(約180mL)の水とともに経口投与する。

なお、服用後少なくとも30分は横にならず、水以外の飲食並びに他の薬剤の経口摂取も避けること。

骨ペーজেット病の場合

通常、成人にはリセドロン酸ナトリウムとして17.5mgを1日1回、起床時に十分量(約180mL)の水とともに8週間連日経口投与する。

なお、服用後少なくとも30分は横にならず、水以外の飲食並びに他の薬剤の経口摂取も避けること。

〈用法・用量に関連する使用上の注意〉

投与にあたっては次の点を患者に指導すること。

1) 水以外の飲料(Ca、Mg等の含量の特に高いミネラルウォーターを含む)や食物あるいは他の薬剤と同時に服用すると、本剤の吸収を妨げることがあるので、起床後、最初の飲食前に服用し、かつ服用後少なくとも30分は水以外の飲食を避ける。

2) 食道炎や食道潰瘍が報告されているので、立位あるいは坐位で、十分量(約180mL)の水とともに服用し、服用後30分は横たわらない。

3) 就寝時又は起床前に服用しない。

4) 口腔咽頭刺激の可能性があるため、必ず、なみずで服用する。

5) 食道疾患の症状(嚥下困難又は嚥下痛、胸骨後部の痛み、高度の持続する胸やけ等)があらわれた場合には主治医に連絡する。

骨粗鬆症の場合(次の点を患者に指導すること)

本剤は週1回服用する薬剤であり、同一日に服用すること。また、本剤の服用を忘れた場合は、翌日に1錠服用し、その後はあらかじめ定めた曜日に服用すること。なお、1日に2錠服用しないこと。

骨ペーজেット病の場合

再治療は少なくとも2カ月間の休業期間をおき、生化学所見が正常化しない場合及び症状の進行が明らかな場合にのみ行うこと。

■使用上の注意

●慎重投与(次の患者には慎重に投与すること)

- (1) 嚥下困難がある患者又は食道、胃、十二指腸の潰瘍又は食道炎等の上部消化管障害がある患者
- (2) 腎障害のある患者

●重要な基本的注意

- (1) 患者の食事によるカルシウム、ビタミンDの摂取が不十分な場合は、カルシウム又はビタミンDを補給すること。特に骨ペーজেット病患者は、骨代謝回転が著しく亢進しているので注意すること。ただし、カルシウム補給剤及びカルシウム、アルミニウム、マグネシウム含有製剤は、本剤の吸収を妨げることがあるので、服用時刻を変えて服用させること。
- (2) 本剤を含むビスフォスフォネート系薬剤による治療を受けている患者において、顎骨壊死・顎骨骨髄炎があらわれることがある。報告された症例のほとんどが抜歯等の歯科処置や局所感染に関連して発現しており、また、静脈内投与された患者がほとんどであったが、経口投与された骨粗鬆症患者等においても報告されている。リスク因子としては、悪性腫瘍、化学療法、コルチコステロイド治療、放射線療法、口腔の不衛生、歯科処置の既往等が知られている。本剤の投与にあたっては、患者に十分な説明を行い、異常が認められた場合には、直ちに歯科・口腔外科に受診するように注意すること。

骨粗鬆症の場合

骨粗鬆症の発症にエストロゲン欠乏、加齢以外の要因が関与していることもあるので、治療に際してはこのような要因を考慮する必要がある。

●相互作用

併用注意(併用に注意すること:同時に摂取・服用しないこと)

水以外の飲料、食物

特に牛乳、乳製品などの高カルシウム含有飲食物

多価陽イオン(カルシウム、マグネシウム、鉄、アルミニウム等)含有製剤
制酸剤、ミネラル入りビタミン剤等

●副作用

(1) 重大な副作用

1) 上部消化管障害

食道穿孔(頻度不明)^{注)}、食道狭窄(頻度不明)^{注)}、食道潰瘍(頻度不明)^{注)}、胃潰瘍(頻度不明)^{注)}、食道炎(頻度不明)^{注)}、十二指腸潰瘍(頻度不明)^{注)}等の上部消化管障害が報告されているので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど、適切な処置を行うこと。

2) 肝機能障害、黄疸(いずれも頻度不明)^{注)}

AST(GOT)、ALT(GPT)、γ-GTPの著しい上昇を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

3) 顎骨壊死・顎骨骨髄炎(頻度不明)^{注)}

顎骨壊死・顎骨骨髄炎があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど、適切な処置を行うこと。

注)2.5mg製剤での報告あるいは外国からの報告。

■承認条件

骨ペーজেット病

国内での治験症例が極めて限られていることから、製造販売後、一定数の症例に係るデータが集積されるまでの間は、全症例を対象に使用成績調査を実施することにより、本剤使用患者の背景情報を把握するとともに、本剤の安全性及び有効性に関するデータを早期に収集し、本剤の適正使用に必要な措置を講じること。

■使用上の注意の詳細については、添付文書をご参照ください。

Trademark and product under license from Procter & Gamble Pharmaceuticals, Inc., U.S.A.

骨ペーজেット病の効能・効果が追加になりました。

骨粗鬆症治療剤・骨ペーজেット病治療剤

ベネット®錠 17.5mg

リセドロン酸ナトリウム水和物錠

薬価基準:記載

劇薬・指定医薬品・処方せん医薬品(注意一医師等の処方せんにより使用すること)

製造販売元

〔資料請求先〕

武田薬品工業株式会社

〒540-8645 大阪市中央区道修町四丁目1番1号

http://www.takeda.co.jp/

Wyeth

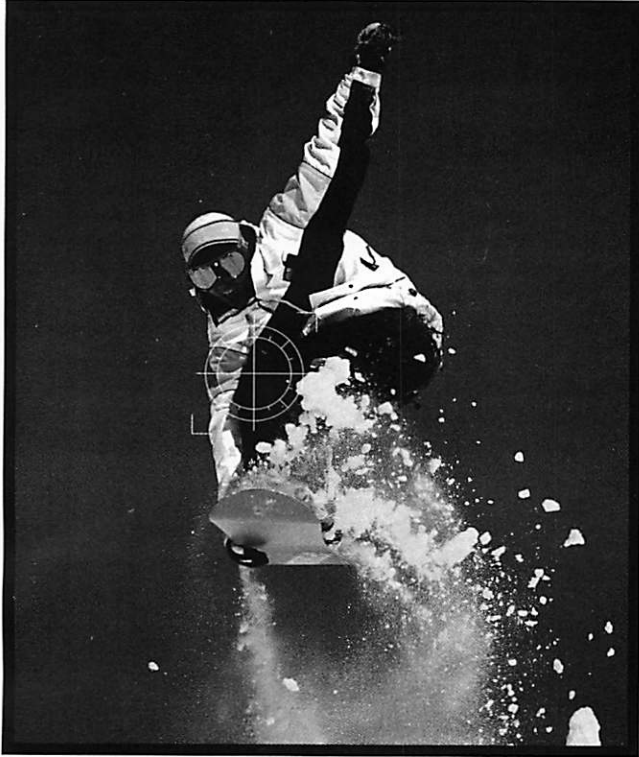
提携

ワイズ株式会社

〒141-0032 東京都品川区大崎一丁目2番2号

http://www.wyeth.jp/

(0807)



経皮鎮痛消炎剤

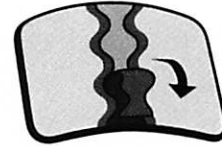
薬価基準収載

指定医薬品 **モ-ラステプ[®] 20mg**

指定医薬品 **モ-ラステプ[®] L 40mg**

【ケトプロフェン2%】

はりやすいからこのカタチ。



3ピース中央剥離方式

○効能・効果,用法・用量,禁忌を含む使用上の注意等については,添付文書をご参照ください。

資料請求先  **祐徳薬品工業株式会社** 学術研修部
福岡市博多区冷泉町5番32号 オーシャン博多ビル 8F
TEL.092-271-7702 FAX.092-271-6405

2005年10月1日

2004年10月1日

2003年10月1日



2003年10月1日

2002年10月1日

2001年10月1日

